

---

# そしてアリスのお茶会は終わる

碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そしてアリスのお茶会は終わる

### 【Nコード】

N9082P

### 【作者名】

碧

### 【あらすじ】

リンは本名を呼ばれるのが大嫌いな怠け者。

めんどくさい体育祭のさなか突然現れた喋って走る常識外れの白いウサギに謎の大穴に蹴り落とされ、気付けばそこは森の中。空にはグリフォン、店に入れば数分で服を作り出す双子にメジャーで拘束されたりする不思議の国。

ウサギを捕まえないと何度でもこの国に来てしまう？元の時間に帰れない？

ヘンテコな国と現実を行き来しながらリンはウサギを捕まえられる

の  
か  
？

## アリスのひとりごと

『わたし』は「せかい」の外側にいた。

正しい時を刻めない時計を胸に抱いて、終わらないお茶会に参加しながら誰も座らない席を見つめ続けている。

見上げれば透けるような青空。

どこからともなく香る花の匂いが鼻腔をくすぐる。

触れたカップの中の紅茶は大分冷めてしまっていてほんの僅かな温もりしか感じられない。

お茶会は終わらない。

あの時からずっと、このお茶会は続いている。

いつまでも何時までも『わたし』は「せかい」の外側。

だけど・・・もうすぐ終わる。終わらせることができる。

瞳を閉じる。

あの日、退席した客がもう一度やって来る。

『わたし』に逢いに少女がここに、来る。

『わたし』と『彼女』。

ひとつの事故で引き裂かれてしまった半身。

わたしたちの間に流れたの時間はそのまま外見に現れていた。

『わたし』は十歳のまま。

『彼女』は十六歳に成長した。

ねえ、と届くはずのない問いを口に乗せる。

「貴女はこのまま『わたし』を忘れ去ってしまうの？」

大人になることを恐れ、子供であることもできない。  
大人になることも出来ず、だけど子供とも言えない。

中途半端でどっちつかずなわたしたち。

ちゃりんと首にかけた時計の鎖が鳴る。

壊れかけた時計。わたしの正しい時を忘れた時計。

彼女が全てを知り、わたしと出逢うとき。

それがこの不可解な「狂ったお茶会」(マッドティーパーティー)  
の終わり。

## プロローグ

それは遠い日の過ぎ去った思い出。

「約束よ。絶対だかね」

「う、うん！約束！」

ふたりの少女は小さく指切りをする。

「このことは二人だけの秘密」

「秘密のお茶会、だもんね」

まったく同じ声がクスクスと同時に鈴のような笑い声をあげた。

「約束。二人だけの秘密だよ」

イタズラをたくらむようにワクワクする心を隠すことなく二人は笑いあう。手と手を繋いで合わせ鏡のようにそっくりな相手と秘密を共有した。それは彼女たちだけの秘密。

見つけたのは辛い現実を忘れさせてくれる素敵で秘密の場所。

体育祭、開催（前書き）

ようやく主人公登場。

## 体育祭　開催

私の苗字は笹倉　名は「リン」。ただし、名前の方は愛称のようなものでももちろん戸籍に記載されているものと違う。諸事情により名前で呼ばれることが大嫌いなので「リン」で通している。なので本名を名乗るのは勘弁してくださいな。

今年高校に入学した十六歳。

性格は親友であり良き理解者でもある葉山女史のお言葉を借りると。

「大抵のことはそつなくこなせる能力があるくせに出し惜しみをして大衆に埋もれたがる怠け者」

になるらしい。

葉山女史の見解が正しいのか否かはまあ、大きく横に置いて、私が熱血とか若者らしい感性を持っているかと聞かれると首を大きく横に振る以外ない。

一緒にいる葉山女史が誰よりも感情の起伏に富んだエネルギーの塊のような人物なので特にそんな印象が強いのだ。

だから葉山女史が言うほど酷くはない、と思う。

・・・多分、きつと、おそらく。

私は本名を嫌っていること以外は至って普通の女子高生に過ぎない。だから、炎天下のグラウンドに整列させられながら偉い人の無駄に長いお話に辟易していた。

「あつい・・・ながい・・・おもしろくない・・・」

その場にいた全校生徒が抱いているであろう気持ちを呟く。近くにいた担任が聞き咎め、睨むが知ったことか。



空からはジリジリと降り注ぐ真夏と変わらない太陽光線。

前を向けばひたすらどうでもいいことを延々と話し続けて生徒の殺意を一身に集める校長。

汗がおでこでキラリと光る。

（校長つて・・・話が長くないといけないのか？）

暑さの余り、思考が明後日の方向に飛んだ。

暑さから意識を逸らすように、「そういえば校長にカツラ疑惑があったなあ~~~~不自然な頭部の膨らみが怪しいとか」などと考えてしまう。

どうしてこう、行事の時の偉い人の挨拶って無駄に長いのだろう。・

・・・謎だ。

「暑いねえ・・・葉山女史？」

私は流れてくる汗を首にかけたタオルで拭いながら隣に並んでいた同級生兼友人である葉山女史に話しかけた。

葉山 はやま 明子 あきこ

私とは中学からの友人であり多分この世で1番私の行動及び思考を読むことの出来る人物であろう。

長い黒髪・黒目という典型的な日本人的容貌をもち、尚且つやる気のなさが全面的に出てしまっている私とは対象的に天然の茶色かったベリーショートの髪に小麦色の肌の見るからに活動的な外見の持ち主であり、実際に陸上部一年の期待のポープでもある彼女はとにかくエネルギーの塊のような人物であった。

葉山女史は体操着の胸元をバカバカさせ、風を送りながら忌ま忌ましそうに頭上でカンカンと私達を照らしている太陽を凶悪な顔で睨み付けている。

余程暑いのだろう。隣に立つ私が葉山女史の胸元がバッチリ確認で

きるぐらい豪快に体操着を動かしていた。

私は自分の体型にこれといって不満はないが自分にはないしかも極上ものを見せ付けられると、その、何かもの悲しい気分させられてしまう。

葉山女史の豊満で形もよい、思わず触って確かめたくなる胸をみるとささやかな、限りなく平原に近い己のそれについてあれこれ考えてしまう。

ヒューと木枯らしに吹かれる（気分）私をよそに葉山女史の苛立ちは限界値が近いらしく彼女の周囲から剣呑な空気が滲む。

葉山女史の見え隠れする胸に視線がくぎつけどった男子達が即座に顔をそらす。

続いて女子を含む周囲にいた他の生徒達が無言で葉山女史から一歩距離を取った。

近寄る者があらば切る！

そんな文字が今にも空中に浮かび上がりそうだ。

葉山女史は暑さ寒さが極端に嫌いな人だから9月に入っても続く残暑に苛立ちを溜めているのはわかるんだけど、ちよっとは抑えてもらわないと周囲はいい迷惑だよ・・・。

勿論、そんなこと後が怖いので本人には言いませんよ？

何気に先程の私の言葉は軽く流されているが機嫌の悪い葉山女史に何か意見する勇氣など怠惰な私にはない。

まあ、本気で機嫌の悪い彼女に意見できる人間なんて私は一人しかいないしその人は今、この場にいない。

「触らぬ葉山に祟りなし」

中学時代に誰が考えたのか学校中に流布していた格言に従って私は大人しく視線を前に戻す。

戻すが事態が変わる訳もなく、すぐに暑さと話しの長さに辟易してしまう。

はあ～～暑いなあ～～面白くないなあ～～。

カンカンと照りつけてくる太陽を葉山女史じゃないけど睨みつけたくなる。地獄のような時間を何とか耐え抜くと校長がようやく開催宣言をした。

「え～～それでは柳高校体育祭を開催します」

体育祭、スタート。

## 体育祭 1

ポケットから取り出したプログラム表によると私の出場競技までまだ時間があったので取り敢えず振り分けられたテントで一休みする。

ふいふいふい。日陰はやっぱいいなあふいふい。

凍らせたペットボトルのお茶を額に当てながら他の競技を見学する私の隣で暑さで不機嫌がマックスだった葉山女史が不意に「ちつ」と鋭く舌打ちをした。

突然のことに葉山女史を振り返り、その顔に浮かぶ表情の恐さ思わず息が止まった。

「忌ま忌ましい……………」

「は、葉山女史？どうし……………」

目を細め、鬼のような顔で私の背後を睨む彼女の視線を追うところから歩いてくる一人の男子生徒の姿。

ああ、成る程。そりゃ葉山女史の機嫌が悪くなるわけだ。

「天敵、登場……………った！」

言い終わるよりも早く私の頭に激痛が走る。

容赦なく人を拳で殴った葉山女史は凍えるような声で一言。

「黙れ」

「はあい……………」

頭が痛い…………が、葉山女史の方が怖いので大人しく白旗をあげる。

叩かれた箇所を撫でながら黙った私をよそに葉山女史はバリバリの戦闘態勢でテントに近付いてきた少年と対峙した。

少年は葉山女史の凄みの（あり過ぎる）視線に臆するそぶりすら見せず、その瞳を真っ向から見つめた。

## 体育祭 2

現れたのは一人の男子生徒。

私達が着ているのと同じ一年生を示す緑のラインが入った体操服を着ており、高校生男子にしては低い身長は葉山女史より一・二センチ低い。顔つきも中性的なためか下手をしたらナヨナヨして見えそうなのに堂々とした態度と真っ直ぐに人を見抜く視線のせいか全くといって良いほど卑屈さは感じない。葉山女史の殺気すら混じっていそうな視線を真正面から受け止めても堂々としているのはすごい。

彼の名前は木崎透。

私達と同じクラスメイト兼クラス委員長にして葉山女史の天敵だ。委員長はテントの中にいた葉山女史と目を合わせたきり一言も発しない。当然葉山女史も何も言わず2人は見つめ合い・・・というロマン溢れるものではなく殺伐とした喰うか喰われるかのガンの付け合い？をしている。

普通年頃の男女が無言でこんなことをしていたら周囲がはやしたてそうなものだが誰一人として声を上げるどころか雰囲気吞まれて身動きさえできなくなっている。

周囲には重苦しい空気がどんよりと鉛のように漂っていた。

あ~~~~、こりゃ、いかんわ。

このまま放っておいたらこの二人延々にガンの付け合いをするよ・・・。

「あ~~~~委員長？どうかしたの？」

厳しい表情を浮かべたまま一言も発しない親友の代わりに私が口を開く。本来ならこんな損な役回りは断固として辞退するのだが周囲からの懇願の眼差しと眼前で繰り広げられる無言のガン付け合い更にはこの不毛な事態に関与できる数少ない人間であることの自覚があつたため仕方なく損な役割に回つたのだ。

木崎委員長が私の言葉に反応する。グツと眼鏡のつるを指で押して直す。

それを見た葉山女史が「けっ」と顔をゆがめていた。・・・彼女の心理描写は「えら～～～そうに眼鏡なんて直して！！けっけっけっ！！」といったところだろうか？

そんな葉山女史の反応に気付いているのかいないのか委員長は冷めた瞳で私の方を向いた。

「山口先生に保健委員を救護テントまで連れてくるように頼まれてね。呼びにきた」

「そうなんだ～～～ってうちにクラスの保健委員って確か・・・」

「私よ」

感情というものを一切がっさい丸ごと捨てたような葉山女史の聲がまるで背筋に入った氷の如く私の耳に届いた。

ぞぞぞぞおっ！！と悪寒が背筋を駆け上る。

う、うあ～～～～。絶対に後ろを振り向きたくない。今、葉山女史がどんな表情を浮かべているのか・・・か、考えただけ胃が痛くなるよ・・・。

戦々恐々とする私の内心なんぞ知ったことかとかばかりに葉山女史は盛大に火花を散らしている。

「ご丁寧にテントまで呼びにくるなんてクラス委員長様はよっぽどやる事がなくてお暇でいらっしゃるのね」

わざとらしい怪しい敬語の中に見え隠れする嘲りに委員長は軽く肩を竦める。まるで子供相手など本気にするだけ無駄と言わんばかりにしようがなさそうに。

「馬鹿な喧嘩を俺に売る前にさっさと救護テントに行ったらどうだ」

「なっ!?!」

軽く流され、挙げ句正論を言われた葉山女史から怒気がぶわつ！と膨れ上がる。

あ~~~~委員長。何もわざわざ怒らせるようなこと、言わなくても……。

案の定、葉山女史は烈火の如く怒った。

「あんたはいつもいつも!?!」

「用は伝えたぞ」

葉山女史の言葉を無視して委員長はあっさりと背中を向けて、テントを出て行く。

「ちょっと待ちなさいよ!?!逃げるの!?!」

その背中をものすごい剣幕で葉山女史が追いかけていく。彼女の目にはもう、委員長しか映っていないのがよくわかる。



途中で捕まったらしく木崎委員長の静かなでも辛らつな言葉と葉山女史の感情的な怒鳴り声がここまで聞こえてきた。周りのテントからもなんだなんだと顔を出している人たちがいるが2人からただ漏れの剣呑な殺気というか雰囲気にもまれて誰も仲裁には入らない。まあ、あそこまでの剣幕の喧嘩に割ってはいるのは誰だって勇気がいるよね……。

しかし……なんていうか……周りの迷惑も少しは考えて欲しいものである。

「あの人たち……どうしてあんなに仲が悪いかなあ……」

しかも、聞いた話によるとあの天敵同士は小学校まで家が隣同士、生まれた時から付き合いのある幼馴染らしいのだ。

2人の過去になにがあつてあんな風にいがみ合っている（というよりかは葉山女史が一方的に噛み付いている感じだが）少し、気にはなったが人様の確執に首を突っ込んでどうこうするほどの気力とお節介は生憎と私にはない。

「はあ〜」と思わず溜息をつく私に近くにいたクラスの女子がにじり寄ってくる。

私の隣に並ぶと今だ凄まじい舌戦を繰り広げている葉山女史達を見て、呆れたように呟いた。

「ホント、葉山さんと木崎くん仲が悪いわね……」

「そうだね……」

思わずしみじみと頷き合ってしまう。

「仲が悪いなら関わらなきゃいいのに……」

クラスメイトが呟いた言葉に私も深く同意する。

葉山女史と委員長は仲が悪い。それこそ学校中に知れ渡るぐらいに仲が悪い。ある意味有名な二人なのだがあの2人は何かと接点が絶えない。

家が隣同士・同じ学校・同じクラス・・・まあ、お互いに無視しあっていたら何の問題もないのだが2人とも互いを無視できないらしく姿を見れば嫌味・喧嘩は当たり前。

冷静な木崎委員長が噛み付いてくる葉山女史を軽くあしらって更に葉山女史が激高するのがいつものパターンなのだ。

しかも今日みたいにわざわざ相手に用事を携えてくるのだから始末に終えない。

学校中に知れ渡っている仲の悪さというのは伊達ではないのだからこの学校にいる生徒及び教職員の中であの2人にそんな用事を頼む人間は一人もない。

いない、のだが別の誰かに頼んだ用事をあの2人はわざわざ（頼んでもないのに）代わるのだ。周囲の迷惑も考えずに。

はたから見れば不毛というか理解不能というか・・・。そんな関係の二人はなぜだか互いに関わることをやめようとはしない。まるでいがみ合うことでしか関われないかのように互いを傷つけあう。そんな2人の心中がどうなのか私には知る術もない。

だけど・・・一つだけ言えるのは・・・。

「互いに気になって仕方がないように見えるんだよね・・・」

「え？なにか言った？」

ぼつりと呟いた独り言にクラスメイトが耳聡く聞きつけてくる。

「ううん。なにも？」

軽く首を振りながら私は内心で葉山女史と木崎委員長の関係について考えていた。

あの2人が互いに抱いているのが好意なのか嫌悪なのか私には分からないけど互いに相手に対して強い強い感情を抱いているのは間違いないと思う。無視ができず、関わりが断てないぐらい強い感情。そんな強い感情を私は誰かに抱いたことがある？

私の口元に自嘲の笑みが浮ぶ。

答えは考えるまでもなくすんなりと出てくる。

（私は誰かにそこまで関心を持ったことなんて、ない）

いつも一定の距離を保って、壁を作っていた。

珍しく葉山女史はかなり踏み込んできているけど彼女が私から離れたすんなりと受け入れるであろう私がいるのも事実だ。

そこまで考えて胸にチクリと小さな針が刺さったような痛みが走る。

（私はとても寂しい人間だ）

ただ何となく日々を過し、そして死んでいく。この心は空っぽで何を注ぎ込まれても溢れることはない。

私の心は空っぽ。ずっとずっと……小さな頃から……あの、時から……。

白い病室に白衣……嫌な記憶が浮びあがりそうになりぎゅうと服を？んだ私の鼓膜を破壊するような歓声と嬌声が響いて私は思わずその場にこけかけた。

な、なんだあ？

直前まで感じていたものが綺麗に掻き消されてしまった。

起き上がり、今だに響く歓声に眉を顰めながら私は音の発生原を探してそして目を丸くした。

「な、何事？」

気がつく私の周りにいた女子が例外なくテントの前に集まりきやーきやーと騒いでいる。

いや、このテントだけじゃない。

他のテントでも例外なく同じ現象が起きていて私はますます目を丸くする破目になってしまった。騒いでいる女子の顔はどれも例外なく興奮と期待に彩られていて私は混乱した。

ここは学校よね？

どうみても体育祭を楽しんでいるというよりもアイドルの出まちのフアンのノリである。

呆気にとられている私を他所に女子達のテンションはいよいよ加熱していく。

周囲にいる男子はかなり引いているらしく所在なさそうにテント内にいた。

私は近くにいた男子の一人にこれは何事かと聞いた。

同じクラスの彼は私の姿を見るなり一瞬ぎよっとしたように目を丸くしたがすぐに何か納得したように頷いた。

何よ、その反応は・・・。

じどーと睨むと彼は慌てて弁明してきた。

「いや、別に変な意味はない！ただ、あれに加わっていない女子がいたことに驚いただけで・・・でもリンだったら納得できるって思っただけであって他意はない！」

女子の集団を指差され、一応は納得する。

というか私だったら納得ってどういう意味だ？

一株ほど気になるがそこは突っ込まない。・・・面倒だし。

「まあ、深くは聞かない。ところでこれは何事なの？」

さつさと喋れと暗に促すとその男子は「悪かったって」と言いつつ答えてくれた。

「こりゃ、次の競技に秋田先輩が出るから女子が騒いでんだよ」

「？」

秋田先輩って・・・誰？

疑問が顔に出ていたのか男子が驚愕の表情を浮かべて私を見ていた。だからさつきから難なのよ。その反応は。

男子の反応に少々ムツとした私にその男子は「まあ、リンだからなあ」などとぶつぶつ呟くと私の方に向き直り真剣な顔で聞いてくる。

「お前、カッコイイ男とか人の噂とか興味ないよな？」

「うん」

即答する私に男子が「やっぱり」と溜息をつく。

基本的に私、他人には興味を持たないし深入りしない主義だ。理由は簡単、人間関係ほど深くなれば面倒なことになると知っているからだ。

「リン・・・お前、本当に女子高生か？その発言は年頃の乙女に有るまじきものだぞ」

「一応生まれて十六年女やっていますよ？ついでに高校に所属している以上は女子高生になるかと」

「・・・一応かよ。いや、話が逸れたな・・・秋田先輩のこと本当に知らないのか？」

「知らない。誰、それ？」

「校内の超有名人を知らないとは・・・はあ。説明してやるよ。秋田正先輩は俺らの一つ上の二年生。そのルックスの良さでこの高校で一番女子にモテる男で彼女をとつかえひつかえ女が途絶えることないっつ話だ。というか本当に聞いた事ないのか？あんなに目立つ男のことを」

そう言つて田舎ものを見るかのような目で見る男子の頭を私は無言で叩いた。

知らないもんは仕方がないじゃないか・・・。私は内心口を尖らせる。

というかそんな有名人が内の学校にいたんだ。全然知らなかった。でもこれでこの騒ぎの謎は解けたわ。

「ありがとう。納得できた」

説明してくれた男子にお礼を言うと私は側に置いてあつた自分のペットボトルに口をつけてお茶を飲む。

あ~~~~冷えた麦茶が美味しい。

「ってそれで終わりか!？」

ごくごくと麦茶を飲む私になぜだか盛大に突っ込みが入る。  
なんだ？

「お前はこんだけ人が騒ぐ美形を見てみたいなあ~~~~とか思わないのか？」

そう言う彼の視線の先には未だに歓声を挙げ続けている女子の集団。

「別にないな~~~~。興味はないし。それにこの人垣の中を割って入ってまで顔を拝もうとは思わないしそもそもそんな体力と気力と根性がない」

きつぱり言い切る私に男子も思わずといった風に頷く。

「それは・・・俺もない」

視線の先にはきゃーきゃー騒ぎながら少しでもいい場所に行こうと醜い争いすら勃発している女子たちの姿。

バーゲンとかでも思っただけど女の集団って怖いよね・・・、私のような無気力人間や男には理解できない心理と行動理念は他所を圧倒するパワーを秘めているらしい。

「・・・すごいね」

「すごいな」

視線の先ではくだんの先輩が何かやったのか女子の集団から一際高い歓声が上がった。





## 運命共同体になる彼との出会い

『午前の部は以上で終了です。午後の部は・・・』

流れるアナウンスを聞きながら私は一人、静かな場所を求めて校内を彷徨っていた。

頬に小さなかすり傷があってヒリヒリしていた。

頬にそつと触れると私は先ほどまで巻き込まれていた厄介事を思い出し肩を落とした。

「葉山女史、今回はいつも以上に荒れてたな・・・」

午前の部が終わり、委員会の仕事をしているであろう葉山女史と一緒に昼を食べようと思った私は彼女を探して救護テントを訪れた。

「すいません。葉山女史はいま・・・」

テントをのぞこうとした私の耳もとを風を切りながら救急箱が飛んでいった。かすったのか頬が微かに痛い。

「・・・・・・・・え？」

背後でがっちゃんと言派手な音を立てて地面に落ちた救急箱を私が見下ろすより早く少女の怒鳴り声が聞こえてきた。

この、聞きなれた声は。

嫌な予感を抱えつつもテントの中をよく見てみると・・・・・・・・案の

定葉山女史と木崎委員長が険悪雰囲気のまま対峙していた。

相当暴れたのだろっ彼らの周囲だけ台風が通過したみたいな惨状であつた。

一体なにが原因でこうなつたのか見当がつくようなつかないような……。

「……葉山。いい加減にしろ」

「うっさい！！私に指図しないで！！」

葉山女史の声はもう涙声だつた。私はぎよつとする。普段の彼女は決して人前で涙を見せたりなんてしない。なのに涙を見せるといふことはよほど追い詰められている証拠である。

異変を感じて私が止めに入るより早く葉山女史が委員長をきつくなめ上げる。

「私に構わないでよ！！いつもいつも！！……何も言わないで……自分だけ全部知つた顔して！！いい加減私を解放してよ！！」

血を吐くような葉山女史の言葉に誰も動けない。ただ事態を見守ることしかできない。委員長は葉山女史の視線から顔を隠すように俯き、そして、何も言わなかつた。

葉山女史の顔が怒りとそれ以上の悲しみで歪む。

「ばか！！」

そう叫ぶなり近く用意してあつた氷の入つた袋を力一杯委員長に投げ付ける。

ちよっ！！それはいくらなんでも危なすぎる！！

「あぶ・・・！」

咄嗟に葉山女史の腕を？んで止めに入っただが一瞬だけ遅く、氷は委員長に向かつていく。

決して避けられないタイミングではなかったはずなのに委員長は何故だか避けることもせず、にその場に突っ立っていた。

氷が委員長の額に当たる。

がつんと鈍い音がして氷が地面に落ちる音がやけに私の耳に残った。

「あつ・・・」

葉山女史が戸惑うような声を上げた。

それと同時に委員長の額からツツと赤い血が一筋流れ落ちる。それを見て今度こそ葉山女史の顔色が変わった。そんな彼女を委員長が見詰める。

2人の視線が束の間真正面から交わった。

「気は済んだか」

冷静な委員長の声。

その声は何故だか葉山女史の方が泣きそうな顔になった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つ！」

葉山女史が視線を外す。？んだ手が小刻みに震えていてそれが彼女の動揺を私に伝えてくれていた。

「葉山・・・・・・・・」

「っ!？」

一歩足を踏み出した委員長から逃げるように葉山女史は私の腕を振り払うとテントから逃げ去った。

残ったのは委員長と数名の保健委員の生徒と私。

委員長は他の人間なんて目に入っていないかのように怪我の手当てを始めてしまった。

私はといえば葉山女史を追うべきどうか迷っていた。

「……いまは、放っておいてやってくれ」

振り返ると手当てを終えた委員長が静かな眼差しで立っていた。

「委員長？」

「あいつは……いま、一人になりたいはずだ……」

そう言う彼の瞳は酷く悲しげだった。

その瞳を見て、もしかしたら委員長は葉山女史との今の関係を良く、思っていないんじゃないかとそう、思った。

「委員長」

「なんだ」

聞こうかどうか一瞬だけ迷って、だけど結局口に出してみた。

「葉山女史のこと、好き？」

意外な質問だったのか委員長は驚いた顔して・・・そして少しだけ遠い目をして何かを思い返しているようだった。

その顔があまりにも大切な何かを懐かしむようだったから私までなんだか切なくなってくる。

委員長が答える。

「この世の誰より俺はその質問に答える資格がない」

私は何も言えなかった。

委員長の顔があまりにも痛みに耐えていたから。ありきたりな言葉全てをその表情が拒絶していた。

そして、今に至る。

「葉山女史・・・大丈夫かな・・・」

去り際に見た葉山女史の瞳には確かに涙が浮んでいた。そしてそこに浮ぶ表情は見たこともないぐらいに辛そうなものだった。心配になった私はやっぱり探そうと踵返しかけたその時。

「あれ？」

弁当とお茶を持ったまま私の足が止まる。

「！？」

「」

どこからともなく聞こえてきた男女の声。しかもなんだか険悪な空気がビシバシと伝わってきて私はその場に固まってしまった。私が動けないでいる内に男女の声はどんどん険悪度を増していく。

「いや。どつちかというと女の子の方が一方的に罵っている?」

よくよく聞いていると女性が感情的になっているのに対して男性の対応はやけに冷静だ。冷淡と言ってもいいぐらい。

まあ、その冷静すぎる対応がよけいに女性を激昂させているのは間違いないんだけど・・・。

なんか、このままここに突っ立っていたら厄介な事になりそうだな・・・。

「面倒事はゴメンだ・・・」

さっさとこの場を離れよう。そう思って今度こそ踵を返そうとした私を引き止めるかのようなタイミングで背後から涙混じりの怒声が響いた。

「私のこと好きじゃないの!」

ひえっ! 恋愛関係の修羅場!!

あまりの迫力に私は再び固まって動けなくなる。

「いや。告白された時にも言ったはずだ。俺はお前のことを好きじゃないけどそれでもいいなら付き合おう。忘れたのか?」

血も涙もない男の言葉の直後。小気味いい痛そうな音が辺りに響いた。その余りにも痛そうな音に思わず肩を竦めてしまう。

い、今は叩かれても仕方がないと思う。

同じ女としてそんなこと言われたら怒るよ。

つらつらとそんなことを考えていると勢い良く教室のドアが開き、一人の女子生徒が飛び出してきた。

大変綺麗な少女である。スタイルもバグンにいい。だけど・・・その可憐な顔に浮かべた鬼女のような表情が全てを台無しにしていた。

こ、怖すぎる・・・。

少女は廊下の真ん中で突っ立っている私を見つけて何故だか数秒驚いたように私をみると親の仇のように睨みつけてくる。  
な、なんで？おろおろとする私に少女が低く命令する。

「どいて!？」

「ハイ。ドウゾ」

少女の迫力と目に浮んだ涙に押されて私は素直に道を譲る。そのまま私なんぞ目に入らないらしい少女は走り去っていった。  
その後ろ姿を啞然と見送っていると痛そうな声が聞こえてきた。

「?」

ヒョッコリと開けっ放しになっていたドアから顔を覗かせ、私は目を丸くした。

恐らくはさっきの少女に平手でも食らったのだろう赤く腫れた頬を手で押さえた少年が教室の床に座り込んでいた。

「いつつ・・・。うん？誰だ？お前？」

少年がこちらに気付き目が合う。彼の左頬には真っ赤な……。

「見事な紅葉」

「初対面の第一声がそれか」

少年が不機嫌そうな顔になる。

「……大丈夫？」

「とって付けたような心配どうも」

皮肉たつぷりにそう言う少年は立ち上がった。少年の背は私より頭一つ半ぐらいは高い。少し長めの髪も恐ろしいほど整った顔も日本人離れた手足の長さもかなり観賞の価値はあったが彼が浮かべる笑顔はどこか作り物めいて感じられる上に私を見る目は探るような光が浮んでいて……怖い。

だから私は。

「大丈夫のようなので私はこれで」

とつと逃げることにした。こつゆうタイプとは関わらないことが一番だ。

そそくさと顔を引っ込めようとする私の襟首を素早く近寄ってきた少年が猫の子にでもするかのようにつかむ。

「ちよつと待て」

逃亡失敗。ちよつと首、絞まっているんですけど？しかもぐえつとか出たよ？



「なんでしょうか？」

かなり引き攣った笑顔を浮かべて振り向いた私だったが少年が長身を縮めて私の顔を覗きこんできたため笑顔を引つ込めざるを得なかった。

状態だけを見たら「ドキドキ」とかときめくような場面なのかもしれない。だけど・・・私が感じているのは「ひやひや」。野生動物に狙われている気になって胃の辺りがスツと冷えてくる。

少年から離れるために無意識の内に足が後ろに下がる。が、私の体はすぐに廊下の壁に当たってしまう。

あつ、と思った時には少年が壁に手をあて私を逃がさないように閉じ込めていた。

あれ？可笑しいなあ？私はただ、廊下を歩いていただけなのに人様の修羅場を目撃した挙げ句なんで見知らぬ少年に追い詰められているんだろう？

可笑しい。どう考えても可笑しいのに。その可笑しい状態が私の現実になっている。

「あ、あははは・・・」

ヤケツパチな気分で笑う私を少年がニコヤカに追い詰めてくれる。

「見ていたんだろ？」

何をとは言わない。だけど、私には身に覚えがあったために微かに肩が上がる。

「な、なんのことやら」

スイと視線を外してとぼける私に少年はニコやかな笑顔のまま私の耳のすぐ側の壁を叩く。

バンツ！と想像より大きな音がして私は思わず目を瞑る。  
そんな私の耳元で少年が優しげとさえいえるほどの声で囁く。

「見ていたんだろ？」

「し、しらな・・・ひっ！」

もう一度壁を叩かれ言葉が途切れる。

「見ていたよな」

優しい声なのに・・・どうしても優しいとは思えない。

「・・・見ていたんだろ？」

私は観念して頷いた。

「正確には・・・聞いていた、かな？」

「兎に角事の顛末は知ってんだろ？」

「わ、わざと立ち聞きした訳ではなくて・・・」

「知っているのだったら・・・見逃す訳にはいかないな」

はっ？

不穏な一言に私は視線を上げた。

「

っ!!」

予想以上に近い位置にあった少年の顔に驚く。咄嗟に逃げようとしたが背後は壁。自分が痛い思いをしただけだった。

「いつつう!」

な、涙が出そう・・・。

黙って痛みに耐えている私を面白がっているのか少年が遠慮のない視線を私に注いでいた。

それに私は怒った。

「・・・何をする気?」

精一杯の睨みを利かせたつもりなのだが余り相手に効いているようには見えなかった。それが更に私のカンに触る。

少年は私に向かってニヤリと皮肉気な笑みを見せると颯るように私の頬を軽く撫でる。

「さて・・・どうしようか?どうして欲しい?」

「どうもしないでよ」

相手のふさげた物言いにどつと気力を持っていかれて私は思わずその場に膝をつきたくなる衝動にかられた。

「・・・脅さなくてもここで見たこと聞いた事言っただけじゃない

なら言わないよ」

まあ、確かに女性に振られて平手喰らったところを吹聴されるのは誰だって嫌だろう。

なのに私の言葉を聞いた途端、少年から表情が消えた。

「信じられない」

いやにキツパリと否定される。

反論しようとする私を遮り少年が続ける。

「人間は嘘をつく。特に女はその傾向が強い。お前は人間で女。だからオレはお前の言葉を信じない」

冷めた目と冷たい表情で彼は私にそう言い放った。

お前の言うことなど信じられるかと、言葉以上に私を見るその瞳が雄弁にそれを伝えていた。

少年が笑う。冷たい笑顔。背中がゾクリとした。

「だから、喋らないようにするんだ。オレが安心できるような方法で」

冗談ではない。いくら私が無気力人間だからといって何でも黙ってされるがままというのはさすがにかなり嫌。

私は勢い良く少年の手を跳ね除けると真っ直ぐにその瞳を見据える。

逃さず、逃さないように強く。

「私は誰にも言わない」

宣言した。

「信じられない」

少年は即座に切って捨てた。その容赦ない口調にちよつと怯みかけるがぎゅつと腕の中の弁当箱を抱きしめて少年を見返す。

「あんたが喋って欲しくないのなら私は絶対に喋らない。信じてもらえないのなら信じてもらえるまで何度だって言う」

少年が感情の読めない目で私を見詰める。その視線に負けじと私も少年を見る。お互い視線を外した方が負けだと言わんばかりに睨みあっていた。

ジツと少年の瞳だけを見ている。深い目だなと思う。吸い込まれそうなほどその目は魅力的なのにそこには誰もいない。浮んでいるのは拒絶の色。少年は全てを拒絶している。

見ていれば分かる。

誰もいない。誰もいない。

そう、この少年が思っていることが分かる。分かってしまう。空っぽな心のあり方は私の心によく似ている気がした。

しばしにらみ合った後、少年がぼつりと「変な奴」と零す。

それについて何か反応するより早く少年が私から離れた。だけど視線だけは私を捉えている。もうその目には敵意は見えなかったけど。

少年は私を見て、ついで腕の中の弁当箱に目を留めた。

「  
腹が、減った」

「は？いきなり何言って・・・ってそれ私のお弁当！！」

突然の意味不明な少年の言葉に呆気に取られている隙に少年が私の手から弁当を奪っていく。

反応ができないぐらいの早業である。

「ち、ちよつと……！」

「ちいせえ弁当箱だな。こんなでもつのか？」

教室に戻った少年は手短な椅子に座り勝手に弁当を開けていた。文句を言いつつその手はひよいひよいとおかずをつまんでいく。慌てて私が弁当を取り替えそうとするが少年は背の高さを利用して私の手の届かない高さに弁当をあげてしまう。

ぴよんぴよんと飛び跳ねてもとてもじゃないが届かない。無理すると弁当ごと少年が倒れそうだから無理もできない。

万策つきた私の目の前で弁当は少年の胃袋へと消えていく。

あ~~~~~っ!!私の貴重な食料が……!!

絶望の味を嫌というほど嚙締める私。少年は完全にこちらを無視して食べている。

「この玉子焼きうまいな。でもから揚げは少々揚げ過ぎ」

「今日はちよつと失敗して。でもホウレン草のおひたしは自分では一押し……ってそうじゃなくて!!」

危ない危ない。空気に流されてついっかりと料理について語るところだった。

「なんで私の弁当をあんたが食べるの!!」

脱線しかかった話題をなんとか建て直すと私はびしっと今だ食べ続けている少年を指差す。

だが少年は食べる手を止めない。顔を上げない。華麗なまでに無視されている。

弁当を食べることに夢中な男にびしりと指を突きつける女。

……これじゃあ指差している私が馬鹿みたいじゃない。

相手の反応がないというのがとことん恥ずかしいものだとは初めて知った。羞恥心で顔が赤らむが投げなしの自尊心が突きつけた指を引つ込めさせない。

落ち着け私。頑張れ私。正義は我にあり。

「べ、弁当強奪するなんて男の風上にも置けない所業よ!」

「肉団子ちよつと味濃くないか?オレ、薄味が好きだ」

「え、嘘そんなに濃い?おつかしいな胡椒入れ過ぎたかな・・・?  
って違う違うちが~~~~う!!」

再び話が逸れかけるのをぶんぶん頭を振ることで必死に軌道修正する。

「誤魔化そうたってそうはいかないからね!私のお弁当をなんであんたが無断で食しているのよ!」

びしっ!

指を突きつけてやる。

少年は顔を上げて私を見ている。

ふっ！勝った！！

もはや弁当を食べられていることよりも無視されていたことが重要なことになっている。

が、私は気にしない。先ほどの恥ずかしさに比べたらそんなこと瑣末なことだ。

勝利を確信して胸を張る私を少年はお結びを食べながらじろじろと不遠慮に上から下までまじまじと見る。その目はまるで珍獣をみる子供のようである。

妙に興味津々であった。

「な、なによ……？」

「お前、おもしれえな」

「は……？」

なにいつているの？こいつ？

少年は指についた塩を舐め取るとなにやら楽しげに笑った。

「メシは美味いしおもしれえ奴も見つかった。頬に紅葉喰らった代償としてはいい拾いもんだっただぜ」

そう言っただけで私の頭に手を乗せる。私の人生の中で一番いいほどの美声が耳元で笑い混じりに囁いてくる。

「ごっそうさん。おまけして77点」

言葉とともにぽんと手に置かれたのは空だと分かるお弁当箱。ひらひらと手を振りながら去っていく少年の背中と空の弁当箱を



交互に眺める。

えっと……これは……弁当を全部食べられた？

それでもって77点というのは私の弁当に対するあいつの評価で  
しょうか？

それらを理解した瞬間、堪忍の緒がぶちりと音を立てて盛大に切  
れた。

「評価が低すぎる！！」

教室のドアを盛大に開けて大声で叫ぶと少年の大笑いする声が聞  
こえてきて更に私の気分を最悪のものにした。

これが後に運命共同体の仲間となってしまう少年と私との最悪の  
出会いだった。

## 運命共同体になる彼との昼食

最悪だ。

グルグルと空腹を訴えてくる腹の虫は無視しつつ（残念ながらぐさめてあげられない）私はグラウンドに向かっていた。

「最低・最悪・・・お昼を食べ損ねた・・・」

考えてみれば葉山女史達の喧嘩に巻き込まれたあたりから今日についてなかった。もっと正確に言えば他人様の修羅場に遭遇したあたりから加速度的に運が逃げていった。

そんなものを目撃してしまったがために見知らぬ少年には脅され、びびらされ弁当を強奪されて挙げ句弁当に点数までつけられて笑われて・・・。

オマケに購買にいけば全て売り切れ。友達に恵んでもらおうと思っても皆食べ終わっていて・・・結果私は何も食べることが出来ないまま昼休憩を終えようとしていた。

「おなか空いた・・・」

体育祭なのに空腹で挑まねばならないのか・・・きついな・・・いくら楽な競技ばかり出場だとはいえさすがに空腹で動くのはきつい。

ひもしさと憂鬱を抱えてとぼとぼと歩いていると前方に見覚えのある背中が見えた。

すらりと背の高い後ろ姿からもいい男オーラを放つあの後ろ姿は！数十分前の光景がぱっと頭の中に蘇ってくる。

同時にムカムカしたものがこみ上げてきて私は早足でそいつに近

づく。数メートルになると助走をつけて走る。

「うん？」

前を歩く少年が足音に気付き足を止める。だが、遅い！！  
私の足が廊下を蹴る。

そして勢いをつけたまま上げた私の右足が少年の無駄に高い背中を思いっきり蹴った。

問答無用の一撃で少年、さすがにバランスを保てなかったらしく前のめりになるが運動神経がいいのだろう無様に転ぶところまではいかずなんとかその場に留まる。

ちっ、無様に転べば少しは気が晴れるのに。  
描いていた未来とは違ってつい舌打ちが漏れた。

「~~~~~っう！誰だいきなりけりなんぞ喰らわせた野郎は！！」

少年が勢いよく振り向いてくる。

放った自分でも惚れ惚れするような会心の一撃を喰らった弁当強奪犯はよほど痛かったのか目に薄っすら涙さえ浮かべながら鬼のような表情であった。

その姿にスカッとした気分になる。

腰に手を当ててニヤリと笑みを見せ付けてやる。

「さっきはよくも人の弁当を強奪してくれたわね」

「お前は……」

少年は私を見てちょっとびっくりしたようだ。だけどすぐに不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「随分と手荒い手段に出たな」

「食べ物への恨みは根深いの。普段は温厚な人間でも空腹の時は多少乱暴にもなるわ」

「普段は温厚・・・？」

心底信じていない態度の少年。ってあんたは普段の私を知らないでいしょうが。なに「こいつ何おおぼら吹いてんの？」みたいな顔してんのよ！

「何が言いたいのよ」

じろりと睨んでやると「ハンッ！」と鼻で笑い飛ばされた。  
ムカつく。

直接言葉で罵られるより腹が立つ。

「言つとくけど私は温厚な人柄でしられているんだから」

本当はナマケモノだとかものくさだとか言われることのほうが多いのだがまあそれは言わぬが花だ。

「温厚……？お前がか？」

心底信じていないのがありありと分かる態度ありがとう少年。お礼に殴ってやる。

そう思って繰り出した拳は完全に不意をついたはずなのに少年に避けられてしまう。

「うおっ！アブねえな！」

ちっ、本当に嫌な奴だな。

「鳩尾に喰らって悶絶すればいいものを……」

「おいおいおい……お前、それ本気だろ？やめろよな」

私としては全男性共通の急所を狙わないだけまだ優しいと思うのだが？

「なんつうかお前一年だろ？先輩は敬えよ。名前は？」

私の体操服の色から判断したのだろう少年はそんなことを言う。

彼の体操服には赤いライン。ということは二年生か。

「そういうあんたは二年生ね。人に名前を聞くなら自分が名乗りなさいよ」

少年がにやりと面白そうに口元を歪める。やたらと皮肉めいた表情が様になる男だ。しかも顔がいいからさらに効果倍増だ。

「そういうお前こそ年上は敬えよ」

「敬えない人間に下手に出る必要性はとんと感じないわね。ただ年が上っただけの馬鹿に敬意を払う必要、ないと思わない？」

「……それってオレが敬うに値しない年が上っただけの馬鹿っていいわけ？」

言葉の内容だけなら怒っていると判断しそうだが少年の声と表情が私の予想を裏切っていた。

少年はひどく楽しそうに私を見ていた。

なんで、そんな顔するの？

どう考えても私は彼に喧嘩をふっかけているのにどうして嬉しうなの？

こいつ・・・人とは違う趣味の持ち主なのでは・・・。

あれだ。虐げられたり罵られたりすることに快感を覚えるとかそういうの・・・。

はっ！もしかして私、危ない奴に絡んだ？

つらつらと変な考えが頭にこびりついて離れない。少年をまともにみていられなくて私の視線が辺りを不自然に彷徨い始めてしまうのを止められない。

あゝどうしよう。一時の怒りに身を任してしまったばかりに厄介なことになっている気がする。

「そ、そりや・・・脅されてお弁当を横取りされ点数までつけられた相手を敬うなんてできないでしょ？」

「ふゝん。でも、さ」

少年が長い指が軽く私の頤をつかんで上を浮かせる。私の視線が強制的に少年の瞳と合わさる。

互いの吐息を感じられるくらい近くに少年の顔があった。

「オレぐらい顔のいい奴が名前聞いてきたら媚の一つでも売りたくなるもんじゃねえ？」

皮肉めいた笑みのまま彼は冷たくそう言い放った。

まだだ。彼の瞳は出会ったときに見せたあの、冷やかな拒絶の

瞳だった。

全てを惹き付けるくせに全てを拒絶している瞳。

空虚な心。

合わせ鏡のように似ている心。

気になる瞳。

同族嫌悪か同情か自分でも分からない。だけど・・・私の口から出た言葉は彼の言葉を否定するものだった。

「こ、媚を・・・」

少年の瞳に飲み込まれそうになるのを必死に堪えながら言葉を紡ぐ。

私の今の偽らない気持ちを紡ぐ。

「媚を売るつもりなら・・・出遭いかしらに渾身の蹴りを喰らわしたりしない」

少年はハトがまめ鉄砲を喰らったかのような顔をして、ぶほつと噴出した。

先ほどまでの冷たさが嘘のように血の通った人間の笑い声を少年があげていた。

床に座り込んで腹を抱えてしまった少年に今度は私の方がハトにまめ鉄砲を喰らったような顔をさせられてしまう。

「な、なにがおかしいのよっ！」

どうして笑われるのか分からない。

普通に思ったままを言っただけなのに少年に何故か受けてしまっていた。

「だ、だって・・・おまつ・・・それ・・・確かにその通りだけど・・・あははっ！」

「笑うなっ！第一私は人に媚なんて売らないわよ！面倒だから！」

胸を張って言い切る私。

人に媚を売る？考えただけで面倒で嫌だ。

「ぶほっ！」

一体なにがそんなに面白いのか再び少年が笑いの発作に襲われ壁をガンガン叩いていた。目には薄っすら涙すら溜まっている。

「お、男らしい・・・！かつこいいなお前・・・」

爆笑されながら誉められても嬉しくない上に女としては微妙この上ない評価されているし。

「~~~~~！のんびりやる気のないまま生きて生きたいのよ。私は！」

少年は笑いの発作がおさまったのか涙目で私を見た。

「随分と若者らしからぬ考えだな」

その顔は面白がっている。絶対に。

「年寄り臭くて悪かったわね」



今までも散々言われた。若者らしくない隠居のじいさんかもっと活動的になれなどなどそれこそ枚挙に暇がないぐらいに言われまくったけど私はやる気のないままでもいい。何かに夢中になったり熱くなったり出来ないのなら何もしないまままで生きていたい。心の空虚さに気付かない振りしていたいと思う。

「悪いとは言っていない」

「じゃあどう言いたいのよ」

少年は意外なほど真剣な顔をしていた。  
からかう様子はない。

じつと深い瞳と・・・さつきまでとは違う冷たくないちゃんと私  
を見ている瞳と目が、合った。

心臓の鼓動が一回だけ大きく乱れた。

「オレが言いたいのは……」

少年が口を開きかけた時。

~~~~~!!

地底から響くような怪獣の唸り声のような奇怪な音が響き渡る。

「!」

慌てて腹を押さえる私。な、なんでこんな時に鳴るのよ！お腹！  
ば、ばっちり聞こえて、いるよね？

恐る恐る顔を視線を上げる横を向いて肩を震わせている少年の姿が目に入る。聞かずとも分かる。聞かれた。

かつと顔が真っ赤に染まってしまふ。そんな私を横目で見ながら死少年が私の頭に手を置いた。

「腹の虫は元気だな」

「うつさい!!」

ぺしつと頭の上の手を払いのける。最悪、最悪だ。

真っ赤に染まった顔を見られないように俯いてその場から逃げようとする私の手を少年が「ちよいまち」と？んで止めた。そしてそのまま有無を言わずに歩き出す。

「ち、ちよつと!!」

私の抗議は当然のように無視された。？まれた手は万力のようにピクリともしない。細い指。白くて細いように見えるのに私は彼の手を振り払えない。外見の優男振りとは裏腹に少年の力はかなりのものだ。

手を振り払うこともできず抗議も無視されて成すがままにされるしかない私が引つ張ってこられたのは校舎の二階にある二年の教室がある一角。その一つに少年は迷いもなく入っていく。手を？まれている私も必然的に一緒に入る破目になる。

男子の着替え場所になっているせいか教室のあちこちに鞆やら制服やらが散乱している。皆、グラウンドに向かっているのか教室には私たち以外に誰もいない。

「待っている」

少年は私の手を離し有無を言わずそう言つと机の上に置いてある鞆を開くと中をあさり始める。

しばらく探っているとお目当てのものが見つかったらしく手が止まった。

「ほら」

少年はぼいっと何かをこちらに投げてきた。

大した距離じゃないけど私は慌てて手を伸ばし飛んできた物体をなんとか手に納める。

「うあ！急に投げないでよ……ってこれは……」

慌ててキャッチしたのは紙袋一杯に入ったパン。アンパン・カレーパン・ジャムパン・カツサンド・ミックスサンド……およそメジャーなところは揃っている。

少年の意図が分からず困惑する私に少年は驚きの一言を発した。

「やるから喰えよ」

「はあ！？」

予想外すぎる言葉に私は思わず手にした紙袋を落としそうになる。なんだ？なんなんだ？人の弁当を強奪したかと思ったら大量のパンをくれたりして……。はっ！まさかさつき蹴ったから？そのお礼？

やっぱりそっち方面の趣味の人！？

ずささっと思わず少年から距離を取ってしまう。

「どうしたんだ？腹減ってんだろ？こっちに座って喰えよ」

こちらの心情など知らない少年は怪訝そうな表情で壁にぴったり

とくついて奇異なものをみるかのような目の私を手招きする。

だが、どうにも近寄れない。信じられない。裏があるのではないのかと穿った考えが頭によぎり気付いた時にはそれは言葉になっていた。

「・・・・・・・・・・なにを企んでいるの？」

「・・・・・・・・・・」

「

少年の反応は実に分かりやすかった。

少年はニツコリと笑うと五歩で私のいるところまでやってきた。

あ、足の長さが違うと歩くスピードも違う・・・・。

見上げればそこには笑顔なのに全然笑顔に見えない少年の笑顔。

「あ・・・・ははっ・・・・」

「・・・・・・・・・・」

少年は無言で私の頬を力いっぱい引っ張った。

「ひゃいひゃい！！ひよめんひゃさい！」

痛い！本気で痛い！！

痛さの余り手をじたばたさせながらしゃべった言葉は既に日本語ではなく言っている自分にも理解不能の異次元語となっていた。

痛さの余りうるんだ瞳で睨みつけてやると少年が楽しそうに笑う。それと同時に手が離れた。

「い、いたい・・・・」

頬がひりひりして痛かった。

「人の親切を疑うからだろう？こんなにいい人のオレを捕まえて  
「たくらむ」なんて言葉を使うからだ」

本当にいい人は他人の弁当を強奪したり気に入らない  
発言されただけで頬を引っ張ったりはしないと思う……。

なんてことは後が怖いので胸の内で呟くに留めた。のだけどバツ  
チリ顔に出てしまったらしく少年の形の良い眉がピクリと危険な角  
度に跳ね上がる。ついでに私の心臓も跳ね上がった。（恐怖で）

「パン！！パンありがとう！あ~~~~おなか空いたなあ~~~~」

誤魔化すように顔をきよろきよろさせ手短な椅子に座る。少年は  
じろりとその様子を眺めていたがやがて肩を落とし、椅子を持って  
きて私の隣に座る。……なぜ隣？

ちよつと疑問に思ったが午後の部はとくに始まっている。私が  
出る競技までには時間があるがあまり悠長にもしていられないので  
私は慌ててパンにかぶりつく。

もぐもぐと空腹も手伝い無心で食べる私。

「……秋田正」

うん？

パンにかぶりついたまま隣に座る少年をマジマジと眺める。数十  
秒後によやく少年が口にしたのが彼の名前だと理解した。

秋田正・・・秋田・・・なにかつい最近聞いた名前のような・・・。

午前中に聞いた話とキヤーキヤー騒ぐ女子の集団が脳裏に思い浮かんで私は思わず手を叩いてしまった。

「もしかして・・・」

「うん？」

じつと少年の顔を観察する。

確かにこの顔なら周りからキヤーキヤー騒がれるのも納得できるわ。

「あんたが滅茶苦茶顔がいろいろという二年生？」

「ああ、そりゃオレのことだろう」

あつさりと肯定する少年 秋田。一般生徒がこんな態度を取ればそれこそ鼻持ちのならない勘違い野郎と受けとられるが秋田ほどの顔の持ち主が言つと嫌味にすら聞こえないのだから不思議だ。

しかし・・・まあ・・・何と言つか・・・。

「外はいいのに中は真っ黒。天は二物を与えずとはまさにこのこと・・・ひやひやいひやい!!」

「だれの、中身が、真っ黒だつて？」

（あんた以外の誰がいるの!?)

ニッコリ笑顔で容赦なく人の頬を引っ張るこの男は絶対に性格が悪いと私は確信した。

[illegible]

確信はしたけど抵抗の手段は見つけれない。

「おお。伸びる伸びる」

「ふやにやひえゝゝゝゝ!!」

「なにを言っているのかわかんねえぞ〜〜?」

ぐにいゝとおもちのように頬を伸ばされあまつさえ好きなよう  
にもて遊ばれる。

痛いし、恥ずかしいしでこっそり泣きたい気分だ。

「面白れえ顔」

「誰が面白くしたと思っているのよ!!」

「オレ」

アッサリと肯定されて二の句がつけられない。思わずその場に蹲りたいぐらいのだっ 力感を感じた私に秋田は目をやる。

笛倉

咳かれた名前に肩が過剰なほど震えるのが自分でも分かった。心臓の音が耳のすぐ側で聞こえてくるような気がしてきた。

「つていうんだなお前。下の名前は？」

すつと胃が冷えた気がした。手が微かに震える。  
名前……とくに下の名前を聞かれるのが私は一番嫌い。  
きゅつと膝の上で拳を強く握り締める。

「……呼ばないで」

ようやく絞り出した声の固さに私自身が驚いた。ちよつとだけ震えている。きつく目を閉じる。

浮んでくるのは白い天井と白衣を着た大人たち。そしてこちらを覗きこむ大人の男の人と女の人。

『自分の名前がいえるかい？』

やめて……………。

思い出したくないの……………。

『私は……………』

包帯を巻いた虚ろな眼の子供が私を見詰めている。

お願い。お願いだから見ないで。

『私は……………』

もういい。もう分かっているの。全部知っているの。



私が欠けてしまっていることは痛いほど分かっているから！

「お願いだから、「名前」で私を呼ばないで」

自分でも把握できない感情が胸の内で渦巻いている。

あれから六年も経つのに未だに囚われて解放されない。そんな自分が嫌だ。

「お願い」

呼ばないで聞かないで 思い出させないで。

忘れないで。

（え？なに、今の声は・・・）

私のものではない声が響いた。その声になんか何かが浮かび上がりそうになる。温かくて優しくて・・・でも同じぐらい怖くて、悲しい何かが。

誰かが遠い場所で、私を・・・。

「じゃあ、お前のことなんて呼べばいいんだ？」

『お前、名無しか？』

秋田の声に小さな子供の声が重なって聞こえた。

慌てて耳を澄まして私と秋田の声以外は遠くのグラウンドから聞こえてくる放送の音楽と歓声しか聞こえない。

今のはなんだったのだろうか？

二つの声。確かに聞こえた。聞いた。なのにどこか曖昧で実感が  
ない。

確かに聞いたと思ったのにどうしても遠い出来事のように感じる。  
そう、感じるのに何故だろう。二つとも泣きたくなるぐらいに懐  
かしく感じてる私がいる？

胸が痛くてたまらなかった。



「ホレ、素直にどう呼ばれたいのか教えるよ」

見上げると初対面の印象からすれば大分和らいだ瞳と目があった。その目を見ていると自然に口が動いていた。

「リン」

教えた途端に後悔した。秋田がものすごく勝ち誇った顔をしたから。

教えるんじゃないかった。苛立ちのまま頭の上の手を叩き落す。

ムカムカしてほとんど顔が不細工になっていくのがわかる。

ああ……元々そんないい顔って訳じゃないのに不機嫌になったらますます………。

「リン、か。一応聞くが本名じゃないかな？」

「違うわ」

ぱくぱくと八つ当たり気味にパンに噛り付きながらそう答える。胸の内にはなんだか敗北感で一杯であった。

「ふ……ん」

何がそんなに楽しいのかニヤニヤ笑いを浮かべ、見つめてくる秋田に妙な居心地の悪さを感じる。

睨み付けても無視してもどこ吹く風で秋田は頬杖をついて私を見ている。

どんどん無視しきれなくなって私は口を開いた。

「楽しい？」

「そうだな。お前の反応とかって面白いな」

一々本当にムカつく男だな！！

怒りの余り手に力が入りすぎてパンが変形する。

こいつとは相性最悪に違いない。相手の言うことなすこと全てが気に入らないなんて初めてだ。

って・・・違う違う。私こんなキャラじゃない。

こいつと一緒にいると本来の自分を忘れてしまいそうになるな。

いかんいかんと頭ふって調子を取り戻す。このパンを食べ終えたらここを出て行こう。

それで終わり。こいつと関わることなんて金輪際ない。

（学校の有名人らしいし接点なんてないもの）

本当の私は面倒くさがりで他人になんて興味を持たないつまらない人間なんだから。

こいつが腹の立つことを言うから・・・だから私もついムキになっってしまった。・・・ただ、それだけ。

ここで別れば二度と接点なんて持たなければ私はいつもの私に戻る。戻る。

だから、私は最後の一欠けらを飲み込み、立ち上がった。

「じゃあ、これで」

顔もろくに見ずにそそくさと教室を出て行こうとする私の手がドアのノブに手を触れるより早く

「リン」

何故だが秋田が呼び止めてきた。

「なに？」

振り向かずにはぶつきら棒に答える。

私はさつさとあんたの顔の見えないところに行きたいんだ。

「リン」

なのに秋田は私の名前を繰り返すばかりで用件を言わない。いら  
いらが募る。

「なんなのよ。一体・・・」

渋々振り向いた私は数秒前とあまりに違いすぎる光景に絶句した。

「え・・・つと？」

なに、これ？

広がる光景に言葉が出ない。

教室を丁度半分に区切った状態で光景が先ほどまでと一変してし  
まっていた。

「・・・森？」

そう。森。鬱葱と生い茂る森とその中を通る道が突如として現れ  
ていた。一瞬、自分が学校の教室にいることを忘れかけてしまった。  
秋田が呆然としたように森を見ながら私に話しかけてくる。

「森、だな」

「森、よね」

お互いに動揺が大きすぎたのか取り乱すこともなく事実を口にしていた。

「ここ、学校だよな？」

「学校よ」

取りあえず、半分は理解可能な空間だ。だけど……

「普通、学校の中に森は、ないよな？」

「ないわね」

「……………」

それっきり何を喋ればいいのかお互いに分からず顔を見合わせて黙り込む。風とともに植物と土の匂いがする。……匂いつきってことは夢じゃない、これ？

呆然とするしかない私たちの背後からたつたかと何かが軽快に走る音が聞こえてきて私と秋田は同時に振り向き、同時に目を向いて同時に固まってしまった。

ありえない。そう秋田が呟くのを聞いて私は無意識のうちに頷いていた。全くその通りだと思った。

有り得ない。有り得ないよ。こんなの。

「忙しい。急がなきゃ！！」

視線の先で忙しそうに走り去る物体を思わず目で追う私と秋田。赤いチエックの上着に下はズボンとをオシャレに着こなし首から提げるのは大きな懐中時計。そんな彼？は赤い瞳と長くて白いお耳がトレードマーク。

ってちよつと待って！！

「なんでウサギが服着て二足歩行で走るって喋っているのよ！！」

私の心の底からの叫びにウサギはぴよこんと耳を動かすと赤い瞳をこちらに向けた。鮮やかな赤い瞳に私と秋田の姿が映し出される。その瞳が一瞬にして剣呑に細められた。

「なんなんですか！？僕は今忙しいんです！早くアリスのところに帰らないといけないんですから

ね！！それとも何ですか。責任とってくれるんですか？取れないでしょ？取れないのなら僕に話しかけないでください！！」

すさまじい剣幕で怒られた。…………ウサギに怒られた！

なにやら色んな意味でショックである。そんな私たちの反応はまったく興味がないらしいウサギさんはぶんぶんと怒りながら私たちの横を通り、そして森の奥へと走り去って行った。

その後姿を見送るしかない私たち。

「…………えつと、一体、何が、どうなって…………？」

教室に森は出てくるわ喋るウサギさんに怒られるわで私の頭の中はショート寸前であった。



救いを求めて秋田を見るが彼の方も事態についていけないのか果然とした顔でウサギの消えた方向を見ていた。

「何が・・・起きているのよ・・・」

フラリとよるめいた拍子に私の足が一步後ろに下がる。そして傾く視界。

「え？」

微かに後ろに視線を走らせればそこには一体いつの間にあったのかぼっかり開いた大穴。

「えっ？えっ？」

一瞬の浮遊感。地面から足が離れ、宙に投げ出されるのが本能的に分かった。手が何もないのに何かをつかもうと動く。

落ちる！

そう悟った途端に底の知れない恐怖がわきあがってくる。心臓に氷が差し込まれたように気分。

「リン！？」

気付いた秋田が間一髪で私の手を？む。

「きゃ！」

穴に落ちるのは免れたが壁に強く叩きつけられる破目になって思

わず悲鳴を上げてしまう。

からからと私の脇を通って小石が落ちていくのを目で追って穴の底の深さにぞっとする。あんなの落ちたら絶対に助からない。

「ごお〜と穴の底から吹く風が私と秋田の髪を舞い上がらせていた。」

「だい・・・じょうぶ・・・か・・・？つう〜おも・・・」

「標準体重よ！！」

心底苦しそうな顔で乙女が聞き流せない暴言を吐く秋田について状況も忘れて怒鳴ってしまう私。そんな私に秋田が怖い顔で怒鳴り返してくる。

「馬鹿！！この状況で暴れる奴がいるか！！」

咄嗟に？んだせいか秋田は左手一本で私を支えている状態だった。状況を把握して今度は私が青くなる。

「う、うめん・・・！！」

「謝るぐらいなら両手でつかんでくれ。今は体勢が悪すぎる・・・」

そういつて差し出された秋田の右手をつかもうとして・・・彼の背後から聞こえてきた聞き覚えのある足音に思わず手が止まる。

これって・・・もしかして・・・？

「リン？」

不思議そうな秋田の声から判断するに彼は気付いていない。

だけど足音は確かに聞こえる。聞こえるどころか嫌な予感と共に近づいてきている。

ちよつと・・・嘘でしょ？まさかそんな・・・。

秋田の背中越しに白い耳が見えて、私の予感は確信に変わった。

「あ・・・！」

「え・・・？」

「あつ　　！！急がなくなちゃ！！間に合わない！！」

さつき森の奥へと消えたはずのウサギ（？）が何故だが戻ってきた。

それはいい。許そう。きっと道を間違えたとかそういう理由だと思う。けどしかしだ！！

「邪魔ですよ！！どいてください！！」

秋田の背中を力の限り蹴っ飛ばして穴に落ちてこないで！！声なき声で事態が止まるわけでもなくて。

私を腕一本で支えていた状態の秋田は突然の衝撃に対処しきれずにあっさりとバランスを崩していく。

「のあ！！！」

「うあああああああ！！！」

「急がなくなちゃ！！！」

バランスを崩した秋田ごとウサギが大穴に落ちてくる。

もちろん支えを無くした私も彼ら同様に穴の底へまっさかさまだ。

(噓~~~~~!!)

なす術もなく私たちは底の見えない大穴へと落ちていったのである。

「忙しい。急がなきゃ!!」

ウサギさんが懐中時計を見ながら苛々しながら動かす白いウサギ耳とそんな科白を最後に私は意識をそっくり手放した。

## 少女の独白または追憶

聞こえた。

ずっとずっと待ち望んでいた音が。

わたしは立ち上がる。

泣きそうだ。いろんな気持ちや思いが胸のなかでぐるぐる渦巻いて私の中から這い出そうとしている。

嬉しいのに悲しい。

大切にしたいのに妬ましい。

時々、ほんの時々頭に過ぎる考えがある。

全てを伝え、乗り越えて欲しい。だけど……

全てを知って苦しめばいい。

罪悪感でつぶれてしまえばいい。

そんな考えが頭を過ぎるのを止められない。

想いを振り切るかのように空を見上げる。

青空。

抜けるようなその青に幼い日の記憶が蘇ってくる。何も知らない。なんの縛りもなくただ笑いあえたあの日々は一体どこへ消えたのだろうか。

もう取り戻すことはできない日々。だけど、それに囚われて進めずにいる人を解き放つことは出来る。

「終わらせよう」

一歩、足を踏み出す。

六年ぶりの再会のときはすぐそこまできていた。

知らない場所でした

グルグル真つ暗な穴の中。かちこちとどこからか時計の音が風の音と共にやけに大きく響いていた。

『時計の音が聞こえるね』

誰かがすぐ側でそんなことを言う。  
誰？

聞き覚えのない声……。のはずだ。なのに、懐かしく感じる。昔、ずっと側で聞いてたような気がする。

誰？

唇を震わせても声にはならない。なのに誰かは分かったらしく少しだけ笑い声が聞こえた。

『まだ、ナイショ』

そつと囁く。さらりと髪が零れる音が聞こえた。

『でも……。もうすぐ私たちは会うよ』

ひんやりとした手が私の手に何かを握らせる。

『時計の音。時を刻む音。ずっと聞きたかった音。あの時からずっと止まってしまった音。動いた』

時計の音が私の手の中から聞こえる。不規則で今にも止まってし

まいそくなその音。

『お願い・・・時計を止めないで・・・』

誰かがぎゅっと手を握り締める。

『お願い。時計を止めようと望まないで』

どうして時計を止めないでと私に言うのだろう。

私は時計を壊したりなんてしない。止めたりなんてしないのに誰かは私こそが時計を止めようとしているように言う。

時計なんて知らない。止めたりなんてしない・・・。

そう言うとなんかが少しだけ悲しそうになったのがわかる。

『・・・忘れないで・・・』

頬に何か落ちて流れた。誰かはとてもとても悲しんでいる。

どうしてだろう？私まで悲しくなってきた、胸が痛い。

忘れないで。その言葉を最後に誰かの気配は消えてしまった。

どこか遠くから鳥の鳴き声が聞こえてくる。嗅いだ事のない花の香りが風に乗って私の鼻腔をくすぐった。

少し身じろぎするとジャリとした土の感触・・・土？

違和感を感じて薄く目を開くと鬱葱と生い茂る木々の間から差し込んでくる暖かい午後の日差しと雲ひとつない高い高い青空を悠々と飛ぶ頭がライオンで立派な翼を持つ見たこともない生物（？）がいた。

しばし無言でそれらを見詰め、そして再び目を瞑る。



「うん。平和だ」

何か・・・全く平和じゃないことがあったような気もするけど気にしない。

平和だといったら平和だ！うん！

そう自分に無理矢理言い聞かせる。

（何も無い。何もいない。何もみていない）

呪文のようにそう繰り返す私をあざ笑うように響く謎の鳴き声。

「ギシヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「うあああ！！知らない振りが出来ない！！！」

勢い良く起き上がる。無視できない。無視できないよ！！  
視線の先には私の常識ではないはずの動物。

「ぎしやあああああああああああああああああ」

「謎の生物がものすごくく気持ち良さそうに鳴きながら飛んでいるよ・・・」

つていうかライオンぽいのに泣き声「がー」じゃないんだ。  
動揺しているせいかどうでもいい所が気になってしまう。

あ～～～なんで空はあんなに青いんだろうね？

現実逃避している間にもライオンぽい生物は何が楽しいのかグルグルと同じ場所と飛び続けている。

「あれは……」

「ぼーと見物していたら現実を受け入れる心の準備ができて私は目の前の生物について考える余裕ができた。」

「グリフォンっていうんだっけ？」

乏しい知識から類似する事柄を引っ張り出す。

テレビかなんかで見た想像・伝説上の生物に今空を飛んでいる生物は良く似ている気がする。

「でも、実際にはいないよね？」

「というか翼が生えたライオンモドキが普通に空を飛んでいてるのは嫌だ。」

「いや、でも服着て喋って二足歩行できるウサギがいるんだからあんな生物がいてもおかしくない……」

「いや、おかしい。」

「即座に自分で突っ込んでしまふ。」

「前提からしておかしいって」

「普通そんなウサギはいないという常識が私の中に蘇ってくる。」

「喋ったり二足歩行するウサギはいない　もちろんグリフォンも存在しない。」

「ならこの状況は何なのよ!？」

パニック状態の私は髪を掻き毟らんばかりに苛立っていた。さつき現実を見ようとしていたがどうやら相当混乱していたらしい。だっこのように首を振り、地団駄を踏む私の頭上で「ギシャ ギシヤ」とグリフォン（認めたくはない）が楽しげに飛んでいる。

うあ~~~~~! 認めたくない。認めたくないけどこれ、現実だあ……。

「なんで……こんなことに……」

そこまで呟いて不意にあの教室で起こった一連の出来事が脳裏に蘇る。

大穴・教室に突如として現れた森と道。そして穴に落ちかけた私の手を必死になつて? んでくれた少年とその少年ごと私を大穴へと蹴り落としてくれたウサギ。

「あ~~~~~!!!!!!」

そうだよ。私、秋田と一緒にあの穴に落ちたんだっ……。底の見えない穴を思い出して思わず身震いが起こる。

穴に落ちたときはもう、死ぬんだばかり思った。穴はどこまでもどこまでも続いていて底なんてないんじゃないかと思った。体から熱を奪う冷たい風を感じながら私は意識を失ったんだ。

「よく、生きているな……私」

しかもまったくの無傷。体操服に多少の土こそついてはいたがそれ以外は穴に落とされる前と全く変わった所がない。

試しに腕やら足を動かしてみるが痛みもなく普通に動く。

「ふむ。どうやら五体満足のような」

一通りストレッチなどをして確かめた後、パンパンと服についた砂を落としながら立ち上がるとグルリと周囲を見渡してみる。

「教室に出てきた森だね。ここ」

森などそう見たことはないが森の真ん中を通る道や雰囲気は教室でみた森と同じように感じられる。

残念なことに教室はなく、森が広がるばかり。

「残念。教室があつたらそっちに行けたのに……。そいえば秋田はどうなつたんだろ？」

一緒に大穴に蹴り落とされた少年のことがようやく頭に浮んだ。ちよつと薄情だろうか？でも色々あり過ぎてそこまで気が回らなかったというのが本音である。

「近くに落ちてないかな？」

ガザガザと手短な茂みを探してみる。事態が余りにも非日常的過ぎて心配だとかあせりが今一どころか今十ぐらい沸いてこない。

どうにも私の常識外のことがたて続けに起きているのでこれが現実だという認識が薄い。どこか夢でも見ているかのようにふわりと浮いた感じがする。

だから秋田搜索もあまり本気になれない。

まあ……。私が無事だつたんだからあいつも同様だと考えて樂觀的過ぎるってことはないよね？

「・・・・・・・・・・もしかして私って結構酷いやつ？」

客観的に見て、もしかしくても酷い奴だ。と突っ込んでくれる人はいない。

「はぁ~~~~。本当に何がどうしてどうなっているのやら」

重い重い溜息が我知らず口から零れ落ちていた。

付近を搜索した結果秋田どころか人の姿さえ見つからない。どうやら秋田とははぐれてしまったと判断していいだろう。

（秋田が湖とかに落ちて死体になってなければ、の話だけどね）

自分で考えておいてなんだが一気に気分が沈んだ。

うあ~~~~。そうだよ。落ちた場所によったら全然無事に済まないよ~~~~。

頭を抱えてしまう。

ここにきてようやく心の底から秋田の安否を案じられた。

「大丈夫よね？」

私、無事だったし。

呪文のようにそう繰り返し考える。

少なくとも落ちたとき下にいた私が無傷だったのだから秋田だって無事だ。そう、信じる。

「秋田のことは生存を信じるとして・・・さて、これからどうしたものやら」

ふむ。と腕を組んで考え込んでみる。

見知らぬ土地でここに来るまでの状況を考えても尋常でない事態に巻き込まれていると判断できる状態で放りだされた場合の適切な対処法など私はもちろん知らない。大多数の人間が知らないことだろう。

考えて思いつくことでもない。

ここはやっぱり秋田を探るのが先決かな？

秋田一人増えても状況把握に差があるとは思えないが1人よりは2人の方が心強いし今の私の心境を一番わかってくれるのも秋田だし・・・放っておくのも人間としてどうかとも思う。

よし決めた。秋田を探そう。そして2人でどうするか話し合う。

「で、肝心の秋田はどこに行っただろう？」

ははっ。手がかりすらないですよ？

どこの誰に言っているのかそんなことを呟いてみる。

「ははは・・・むなしい・・・」

ここで一人漫才していても虚しさだけが倍増しそうなのでどこまで続いているのか分からない森の道を進んでみる。

テクテクと歩く。

森の中、爽やかな風と穏やかな日差し。こんな状況でなかったらピクニックでもしたい陽気だな・・・。

風に木々が揺れる。

どこか懐かしい気さえしてくるのは何故だろうか・・・。

「どこまでこの道続いているんだろう・・・」

根本的疑問が湧き出てくる。

歩いても歩いても景色は変わらず道が途切れることも二手に分か

れることもない。誰とも出会わないし何とも出くわさない。

まるで同じ場所をメビウスの輪のように歩いている気さえしてくるほどの変化のなさだ。

だけど……。

「道があるってことは人が……少なくとも定期的に使う人間がいるってことよね……」

ちゃんと舗装された荒れてない道。多分誰かが使っている……と思う。だからこのまま歩けば人に会うなり人のいる場所に出られると思うんだけど。

あまりの変化のない光景にちよっぴり自信がなくなってくる。

「うゝん。私、本来なら考えるタイプじゃないんだけどな……」

ほかに誰もいないから考えざるを得ない。本とか雑学関係は好きだったから変な知識だけは溜め込んでいたけど……役に立つ……かなあ？

ああ……ついに自分にまで自信がもてなくなってくるよ。

「まったく。この道の先になにがあるのよ」

苛立ちついでに愚痴る。

答えなんてはなから期待していないのに風と共に聞こえた。

（この先には……の店があるよ）

「えっ？」

驚いて足を止める。慌てて周りを見てもあるのは森の木々だけで声の主は見つからない。

「どういうこと・・・？」

確かに聞こえた。

声。女の子の声が。

「空耳？ううん違う」

はつきりと聞こえた。空耳なんかじゃない。

「だれ、なの？」

今度は答えは返ってこなかった。  
落胆した気持ちを抱えたまま歩き出してすぐに一軒屋が建っているのが視界に飛び込んできた。

「家だ」

あの声の通り家があった。

ドキドキする胸を押さえて私はわざとゆっくりその建物に近づく。レンガ造りのこじんまりとした家が森の途切れた先に建っている。近寄ってみるとプランナーがあり見たことのない花が植えられていた。

玄関先に吊るされた看板には見たこともない文字でなにか書かれていた。どうやら何かの店みたい。窓から店内をのぞいてみるが暗くてよく分らない。

「さっきの声が言った通りだ・・・」



本当に店があつた。

取りあえず人がいそうな場所に来れたのだ店に入ってみよう。

## 不思議なお店の不思議な双子

ドキドキする胸を押さえて私はわざとゆっくりその建物に近づく。レンガ造りのこじんまりとした家が森の途切れた先に建っている。近寄ってみるとプランナーがあり見たことのない花が植えられていた。

玄関先に吊るされた看板には見たこともない文字でなにか書かれていた。どうやら何かの店みたい。窓から店内をのぞいてみるが暗くてよく分からない。

「さっきの声と言った通りだ・・・」

本当に店があつた。

取りあえず人がいそうな場所に来れたのだ店に入ってみよう。

「ごめんください〜」

カランとドアベルが鳴る。ほんの少しだけ開いたドアの隙間から店内を窺う。そして店内に溢れているものを目にして思わず店名を呟いてしまった。

「洋服屋さん？」

店内のあちこちにたくさんの衣服が置かれている。しかもその種類の豊富さといったら・・・。

置かれた数点を手に取ってみる。

最初に手にとったのは女性用のドレス。どこの御伽噺にでてくるドレスだと突っ込みたくなるぐらい手の込んだ一品。お値段は考えたくない。

次は男性用のスーツ一式。ステッキにシルクハツと付き。年配の渋い紳士に着て頂きたい一品。こちらも細部にまでこだわってあってやっぱりお値段は考えたくない。

最後に手にとったのは先の二点よりちよつと方向を変えた服。動きやすさを重視したつくりだがさり気無いオシャレは忘れない趣味のよい服だ。これは私みたいな学生でも買えそうな手ごろなお値段ぽい。

「うあ~~~~。これ、全部服？」

老若男女身分の上下関係なくまさに節操なしに服が置かれている。高そうな服も普通の安い服も関係なく置かれているのだからいいのだろうか？

備え付けの棚やハンガーは服で一杯。それでも余った分に関しては天井からぶら下げられている始末。

どんな客層をターゲットにしているのか全然読めない。

あきれ果てて店内を見渡す。

「これは・・・むしろ全年齢対象にしているのしか思えないわ・・・」

あまりにも節操なさ過ぎ。

「「そうともいえる（わね・ね）」」

「のあ！-!-」

背後から突然聞こえてきたユニゾンに私は飛び上がりんばかりに驚いた。

「お客さんだよ。妹よ」

「お客さんね。弟」

一体いつの間にそこにいたのか双子らしい顔立ちの良く似た少年と少女が興味深そうにこちらを見ていた。

おそろいの色違いの服に少年はスケッチブック・少女は針山にベルトを通したものを手につけメジャーを持っている。

お店の人・・・？うん、制縫担当の人？

私と同じ年ぐらいに見えるのに偉いな・・・。

ぼーっとそんなことを考えていると私の顔をまじまじと見ていた少年の目がキラんと光った。例えるならターゲットロックオンと聞こえてきそうな感じだった。

「これは 。スケッチブックを渡してくれ！妹よ！！」

「すでに手に持っているわ。弟」

お互いを「妹」「弟」と呼び合う双子。

（どっちが上なのよ）

些細な私の疑問に何故だがテンションの上がったらしい彼らが答えてくれるはずもなく少年は一心不乱にスケッチブックになにやら描き込み始め、少女の方は無表情にメジャーを引っ張った。

ただのメジャーなのに少女の迫力のせいか暗殺者とかが使う武器に見えて仕方が無い。

「あ、あの・・・」

「大丈夫・・・何も怖いことはないわ」

無表情に抑揚のない声で言われても！！

今にも三味線の線を使う某有名時代劇のテーマ曲が流れてきそうな雰囲気で怖がるなっていう方が無理よ！！

「さ、さようなら！！」

「逃がさない・・・」

くるりと踵返した私だったがいつの間にか胸に回されていたメジャーに足止めされてしまう。

い、いつの間に・・・！！

「トウイドル・ディー三十三の隠し技の一つ。「メジャー止め」から逃げられた者はいない・・・」

なんかもう突っ込みどころが多すぎて逆に突っ込めない！！

「そして・・・私の採寸は一ミリの狂いもないのが自慢……。見たところ、上から……」

淡々と告げられたサイズはまさにどんぴしゃだった。

「え、え、え~~~~~っ！！」

見ただけでなんで分かつちゃうの！？  
すごい特技だ。変な技？使うけど。

「だから・・・大人しく私に測られなさい」

ちよつと待つて！！セリフの繋がりが分からない！！

じたばたと暴れ出そうとするがディーと名乗った少女はたくみにそれを押さえ付ける。や、ややややけに手馴れてませんか？お嬢さん！

「大丈夫。怖がらないで。そのうち私の採寸以外で満足できなくなるから……」

「それ！全然大丈夫じゃないから！！」

どんだけマイナーでディープな世界に私を連れて行くつもりなのこの人！！

あまりの展開に怯えきつた私を他所にサイズを余す所なく測り終えた少女はテキパキと相方と話を進め始める。

「布の色は象牙色の肌が栄えるような色あいのものを選ぶ。弟」

「うむ……。彼女の顔立ちや雰囲気から考えると可愛らしいものより実用的で機能性重視のシャープなデザインがよいと思うぞ。妹よ」

「そうね……。けどやはり女の子らしい部分も入れるべきだね。例えば……このデザインのここ」

はこうして、それからこれはこうするの。弟」

「おお……。それはいい考えた。それならここはもう少しこう、青みの強い布を使ってだな……。こう、刺繍を入れるのだ。妹よ」

「うん。良いと思うわ。これで行きましよう。弟」

「基本路線は決まったな。妹よ」

二人でスケッチブックを覗き込んでぶつぶつ呟いては色々書き込んでいた双子はうんうんとなにやら納得している。・・・あの、二人だけで納得されても私、困るんだけど・・・。

しかも私が逃げられないようにメジャーが巻きついたままだし。逃げることもできない。かといって二人の会話にも付いていけない私を他所に双子の兄はものすごい勢いでスケッチを描き、色をつけていく。姉のほうも神業とも呼べる手際の高さで布を裁断したり縫い合わせたりしていた。

ひらりと私の足元に一枚の紙が落ちる。ヒョイと何の気なくそれを拾い上げそこに描かれたデザインの繊細さと緻密さそしてなにより美しさに目が丸くなる。

「うぁ・・・」

感嘆の声しか出てこない。

センスやら絵心のない私でもわかる。これはすごい。

すごいという言葉でしか表せない自分の語彙力のなさが嫌になるぐらいこれはすごい。

「素敵・・・だけど・・・」

問題はこれがものの数分で描きあげられたという点だ。

彩色まで丁寧になされている上に細部まで描きこんであるってどんな早業なのよ。

姉の方に目をやれば・・・っておいおいおい！！

「うそだぁ・・・」

私は自分の目を疑った。

さっきまで布を一心不乱に切っていたはずの彼女の手の中には手のこんな完成間近のドレスが一着。

（有り得ない！有り得ないって！！）

数分で全ての過程を終了したっていうの？よく知らないけどドレスとかって凝ったデザインであればあるほど時間が 月単位へたをすれば一年ぐらいの時間がかかるものじゃないの。私、授業でエプロン作った時だって一日じゃできなかったわよ！

有り得ないを繰り返す私の目の前で少女が糸を切り満足そうにドレスを見る。

「完成したわ。弟」

少女の手の中のドレスに少年も納得したのか満足そうに微笑んでいる。

「ふむ。相変わらず仕事がはやいな。妹よ」

はや過ぎだつて。ドレスのデザインから裁縫終了までももの数分ってどんな早業よ。

なんだかここに来てから突っ込み以外してないような気がするよ。ああ。葉山女史に突っ込まれていた日々が懐かしい。

しみじみと葉山女史を偲んでみる。本当に葉山女史と過ごしていた日々が遠く感じてしまうよ……。

双子が作ったのは鮮やかな赤い生地を基調としたシンプルなドレス。ス。

だけどフリルなどではなくイメージとしてはチャイナ服と洋風ドレ



スの融合型。サイドに切れ目が入っており、体に密着するためかなり体の線が出る。その分裾は短くて従来のドレスより動きやすそう。制作過程には大いに疑問が残るが出来上がったドレスは文句なしに素敵なものだった。

現実逃避気味だった私の目を釘つけにするほどに。

「・・・客が見ているな。妹よ」

「見ているわね。弟」

「服とは誰かに着て貰ってこそ生きる。それが服の幸福だと思う。妹よ」

「同感。服を作ったら今度はそれを着こなせるものに着てもらうこと。それこそが自然の摂理よ。弟」

こくりと同時に頷くとグルリと首を巡らせ双子が私を見る。少女は無表情に少年はにこやかに。だけど両者とも目だけは獲物を狙う肉食獣のごとく輝いていた。

「「というわけでこのドレスに着替えよう」「」

ユニゾンで宣言するなり双子がドレス片手に私にスッと近寄ってくる。

「え、あ、ちょっと・・・何？この展開・・・」

身の危険を感じるもジリジリと追い詰められている私。

「大丈夫だよ。絶対に似合う。僕が保証するよ」

「私たちトウアイドル兄妹の服に「はずれ」の文字がないのは絶対不変の真実。さあ、安心してその身をゆだねてこの服を着なさい」

服片手に無表情で迫る少女が様々な意味で怖すぎて涙が出てくる。

「ちゃんと化粧と髪型も整えてあげるよ？」

いつの間にやら化粧道具を手に少年がそんなことを言う。  
気遣いの方向性が私の求めるものと違うし！  
迫り来る双子から逃げようとする私。だけど……！

「メジャー止め」からは何人も逃げられないと言った……」

忘れていた……！！

いつの間にか手足にメジャーが巻きついていて。み、身動きがでない。

「ふふふつ。さあ、観念して」

それ、悪党のセリフ！しかも服片手に言つとえらく迫力が減少です。ね！（違う迫力はでているけど）おまわりさんに見つかったら確実に捕まるやばさだよ！

「この服を着なさい」

うあ~~~~ん！無言で体操服を脱がそうとしないでええええええ！！  
手足にはメジャー！。後ろは壁。前からはドレスとメイク道具を手

に迫り来る双子。

に、逃げ場なし！

「「さあ！！！」」

「いやああああああああああ！！！」

私の力の限りの叫び声で森中の鳥達が飛び立った。

数十分後

私はドレスを着付けられ、メイクをバッチリほどこされた挙げ句に髪をいじられていた。

手馴れた手つきで少年の方がアップした私の髪に髪飾りをつけていく。魔法のように動くその手つきを鏡越しに見慣れない少女が見詰めている。

生まれて初めてした化粧はあまり濃くなくナチュラルにされている。

「せっかく若いし可愛いんだからちよつと印象変えるぐらいのナチュラルで十分だよ」とはメイクを担当した少年の言葉。

使った化粧品がいいのか想像したより気持ち悪くない。匂いもほとんどないしべたべたもしない。これなら普通に使ってもいいかなとちよつと思った。いや、化粧なんて自分じゃできないけど。

「うゝゝむ。やっぱりこっちの髪飾りの方がいいのかな？どう思う。妹よ？」

着付け以外はアドバイス役に徹している少女が的確なアドバイスを  
をする。それに頷きながら少年が髪型を決めていく。

ちなみにいま私たちがいる場所はお店の置くにあるお店からは死  
角になったスペース。そこにある姿見の前に座らされた私に双子が  
メイクしたり髪型を整えたりしているわけだ。

「・・・できた」

ダム（少年のこと。名前を聞いた）が満足そうにそう言うので  
ー（少女のこと）がそつと私の肩に手を乗せ、軽く微笑んだ。

「完璧だわ」

鏡に映る少女はまるで私ではないようだった。

基本的な顔は私の顔。なのに薄く化粧をして髪型を変えて着てい  
る服が違っただけで驚くほど印象が違っ。

これが・・・私？

信じられなかったけど鏡に映る少女は困惑しきった顔で私と全く  
同じ動きをしている。

シンデレラの魔法に掛った気分だ。

声もでない私に双子は勝手に盛り上がる。

「どうどう。いいでしょ？すごくいいでしょ？誉めて誉めて！僕  
を誉めて！」

「・・・弟」

「僕を褒め称えて！」

両手で自分を抱きしめるように身もだえするダムにディーも私も

若干引き気味だ。

「誤解されるから変態発言は控えなさい。弟」

鼻息も荒く私に迫ってくるダムをディーが溜息混じりに私からひっぺかす。「変態発言」はさすがに効いたのかダムはいじけてスケッチブックに暗く「のの字」をつつり始める。そしてそれをディーが鬱陶しいと一刀両断してますますダムを凹ませる。大変分かりやすい悪循環である。

実に楽しげ(?) なトウィードル兄妹に私は置いてきぼり感はない。めない。

「なんだかなあ……」

半強制的にドレスアップをさせられたのは本当の本気で彼らの服を着ているところが見たいという欲望のためだけだったんだなあ・・と実感した。

きつと彼らは舞踏会にいけとか人前に出るとかそんなことは考えていない。ただ純粹に自分たちの服を最高の形で着て欲しい。そしてそれを見てみたい。ただそれだけだったんだろう。巻き込まれる方はたまったもんじゃないけど。

「はあ~~~~」

この分じゃ私の話は当分聞いてもらえそうにないなあ。そんなことを考えながら窓に目をやると入り口に見覚えのある姿が……。

「あつ!」

反射的に立ち上がると入り口に向かって走り出す。  
ドレスといっても動き易いのが助かった。おかげでコケルことも  
躓くこともなく走れる。

突然走り出した私にディーとダムが喧嘩も忘れてみている。ディ  
ーの謎の必殺技が出てこないのありがたい。

私は勢いよくドアノブを回す。

からん！とドアベルが抗議するように一際高く鳴った。

響いた音に驚いたようにドアの前でノックしようかどうか悩んで  
いた少年が目を丸くして、次いで私の姿に二度驚いた。

「え、あの……」

彼の戸惑いに気付かずに私は彼の名前を呼んだ。

「秋田！無事だったんだ！」

「秋田って……もしかしてお前、リンか!？」

「うん」

頷くとまじまじと私の姿を見る。

「なんちゅう格好をしてるんだ。お前は……」

「こ、これには色々事情があるのよ」

照れ隠しで俯く私の頭を秋田が撫でようとしてセットされた髪に  
気付いて手を彷徨わせると最終的に自分の頬を照れたようにかいた。

「ま、なんにしる無事みたいだな」

その言葉に私の顔は笑顔に変わる。

「秋田もね」

秋田がニヤリと笑う。そして改めて私の格好の違和感について問うような目線を私に送ってきた。

えっと・・・本当になんて答えよう？

取りあえずその話しは後でと言いかけた私を遮るように。

「メジャーを！！弟！」

「すでに手に構えているぞ。妹よ」

非常に聞き覚えのあるセリフが辺りに響いてくる。私の時とは男女逆転はしていたがこの先の展開は容易に読めた。

「な、なんなんだこいつら・・・」

目を白黒させる秋田。

デイーが無言でメジャーを引つ張った段階で何かを感じとったのか顔色をさつと変えた。

しかし、デイーの方が一枚も二枚を上。彼女の場合警戒したときには全て終わっている。

「トウアイドル・デイー三十三の隠し技の一つ。『メジャー止め』本日二度目のお目見え」

嘘だ。本当はもっと使っている。

「二度目よ。だって使うのは二人目だから」

人の心と呼んだようなセリフはやめようよ……。

「うおい！こら！なんなんだお前は！！」

当然のことながら暴れる秋田。しかしそんな秋田をディーはやすやすと押さえ込みサイズを測っていく。

（うあ……男の子が相手でも押さえ込めるんだ）

恐るべきディー。

秋田は必死に逃げようとするのだがディーがそれをたくみに抑え、抵抗が酷くなるとどこからともなく出したメジャーで動きを止める。

（あ……さっきの私はこんな風だったんだ……）

何となく再現フィルムを見ている気分だ。

ちらりと隣に目を向ければダムが物凄い勢いでスケッチブックにペンを走らせていた。

「あんたらは客が来るたびにこんななの？」

だとしたらお客は来なくなるな。私だったらこんな店嫌だ。

私の言葉に双子は手を止めることなく声を揃えた。

「「これっ！というインスピレーションを感じたお客の時だけ（よ・だよ）！！」」

もう何も言うまいと私は決めた。



「ってちょっと待て！！オレを放置するな！！助ける！！」

何も言っまいと私は決めた！！

おめかしした少年少女は世界を模索する

「だぁ~~~~!! 一体全体何がどうなっているんだよ!!」

私同様に双子にいいように着せ替えをされた秋田は憤慨していた。いらいらと落ち着きがない。

「ったく。なんだよこの服・・・コスプレかってってんだ」

自分の格好を見下ろして忌々しそうだ。でも・・・。

「似合っているわね。その格好」

「ああ？そうか？堅苦しいだけじゃねえ？」

そんなことはない。ものすごく似合っている。

秋田が双子に着せられたのは古き良き時代の英国紳士が着ているようなフォーマルな正装姿。もちろんあの双子の手がけた作品だ。そこらに売っているものと手間もセンスも違う。

シルクハットや白手袋ステッキなどの小物もバッチリ決まりまるで若い伯爵といった雰囲気だ。隣に老執事がいないのが心底惜しい。秋田自体が持つ日本人離れた手足の長さで容貌のよさを服が更に引き立てている。

「私はカッコイイと思うよ。よく似合っている」

「なっ!!」

秋田が何故だか絶句する。うん？こんくらい耳にたこが出来るぐ

らい言われているだろうから照れているってことはないと思うけど。

「何よ?」

言い返すとさつと横を向いて口を押さえる。さつきから拳動が不審である。

「秋田?」

「いや、別になにもない」

変な奴。

「あゝなんだ。店に入った途端に客の採寸を有無も言わずはじめる服屋ってどうよ」

あからさまな話題変換だったがその文句には大いに頷くところがあった。

だけど私はあえて無言で通し、口元を隠すようにティーカップに口をつけた。ふわりと紅茶のいい匂いがした。

秋田も茶菓子として用意されたマフィンにブルーベリーのジャムを塗るとそれを盛大に口に放り込む。

「それにここはどこだ? オレ達は教室にいたはずだろ? なのになんでこんな森の中にいるんだ?」

矢継ぎ早の質問に私が答えられるものは少ない。

「知らないよ。私だって大穴にウサギに蹴り落とされて気付いたら森の中にいたんだから」

「大穴・・・ウサギ・・・ってあれ、夢じゃ・・・！」

「ない・・・と思う」

確信はないけどと続けると秋田は難しい顔をして黙り込んだ。

「何か常識外のことに巻き込まれているのはわかるんだけど・・・」

「

空になったカップを手で弄びながらそう言った私に秋田は溜息をつくとソファアの背に深くもたれかかった。

「結局詳しいことは何も分からない、か。あの双子に話を聞ければいいんだが・・・」

チラリと秋田が視線を投げた先にはせつせと服を作り続けるトゥイードル兄妹。私と秋田はあれから散々着せ替えを強制された挙句（デイーの謎の技で逃げられなかった）「集中して作るから紅茶でも飲んで寛ぐといいよ」と指差された先にはソファアとつい先ほど用意されたかのようなお茶とお茶菓子のセット。

「・・・」  
「・・・」

思わずその場に突っ立って馬鹿みたいにその光景を凝視してしまふ私たち。

私たちの着せ替えに付きっ切りだった双子が用意したわけではないしこの家には彼ら以外の人の気配は感じないしデイー達もそれらしいこと言わなかった。・・・もし誰かいたらお茶の用意をしてく

れたことに気付いたはずだが実際は私も秋田も気付かず、でもお茶の準備はされていた。

色々・・・こう、本当に考えるべきことが多かったが取りあえず私たちはソファーに座り、迷った挙げ句お茶をカップについて今に至っている。

「喋って二足歩行するウサギに数分で服一着作る双子にどこからともなく用意されるティーセット・・・」

指折り数えて遭遇した事柄を並べてみると事の異常さが改めてよくわかる。

（グリフォン（？）がいるぐらいだし・・・どう考えても・・・）

「ねえ・・・秋田・・・」

「なんだ」

苦虫を百匹ぐらい噛んだ挙げ句に正露丸を更に噛んだような顔で秋田が私を睨む。

「こいつてさ・・・」

「言うな。オレは認めてない」

人のセリフを遮りそっぽを向く秋田。気持ちは判る・・・わかるけどさ・・・。

「うんなこと、あるか・・・」

ぼつりと呟いた言葉は断言というより希望に近い。

多分私たちは同じことを感じ取って考えている。だけどそれが余りにも突拍子のないことだから信じたくないんだ。

「そんな、ことが・・・」

つぶやく声は忌々しそうなのに途方に暮れている。

秋田の気持ちは良く分かる。だけどいつまでも目を逸らしている問題でもない。

だから私は口を開く。

「秋田。私たちもしかしたら・・・」

秋田は目を逸らしたままこちらを頑なに見ようとしない。

信じたくない。信じられないのは私だって同じだ。ぎゅっとドレスを握り締め私はその言葉を口にした。

「もしかしたら・・・ここは私たちの知らない世界なんじゃない？」

秋田は何も言わない。肯定もしないけど否定もしない。沈黙それこそが何よりの答え。

秋田は不機嫌そうな顔のまま視線を私に戻した。

「言うなっぺんだろぅが・・・」

「チッ」と舌打ちすると秋田は観念したように肩の力を抜いて仕方なさそうに私に同意してくれた。

「別の世界……かどうか認めたわけじゃねえけどオレらの常識じゃ有り得ないことがここではまかり通っているのは認める」

「うん」

私たちの常識ではありえないことがここでは普通に起きている。住人達も普通に受け入れている。

それこそが私たちにとっては異常だ。

ウサギは二足歩行しない。グリフォンはいない。服は数分でできない。

なのにここでウサギは二足歩行する。グリフォンはいる。服は数分で作れるになっている。

常識という面においてかなりの格差がある。

私は紅茶を注いだカップを手を持つ。

「別の世界……」

カップに注がれた琥珀色の液体に私の顔が映る。

黒い髪。黒い目。特にどうともいえない十人並みの顔（ただし今はメイクを施されているから印象は違う）。

人によつては可愛気がないと言われることもある顔に覚えてもない面影が過ぎった。

「……………」

知らない顔。でも嫌でも知っている顔。

同じ顔で違う表情を浮かべるアナタは……ダレ？

耳の奥に声が蘇る。

『自分の名前がいえるかい？』

目を瞑って幻聴を追い出す。今更思い出してもどうにもならない。私の中から欠けてしまったものを取り戻すことはできないのだから。

手を動かすとカップに笹並みが起こり私の顔を掻き消す。グルグルと景色が混じる。

「ワンダーランド」

不意にその言葉が口をついて出た。

「あ……」

意図せずに零れたのは知らないはずの言葉。はっと口を押さえるが一度口から出た言葉が消えることはない。

「リン？」

私の様子に気付いたらしい秋田がこちらを窺う。だけどそれすら私には遠く感じられた。

どくどくと血が体を巡る音が耳に聞こえる。

私、いま、なにを言った？

（ワンダーランド）

どくんと一際大きく心臓が鳴った。

（なまえ……）



そうこの世界の名前は……ワンダーランド。

(どうして……)

分かるだろう。知らないはずなのに妙な確信があった。  
ワンダーランド。それがこの世界の名前だと。

『……ここはどこなの？』

『ここはワンダーランドだよ。ようこそ。アリスのお嬢さん』

どこか遠くからそんな会話が聞こえてくる。それと同時に断片的なイメージが浮かび上がる。

白いテーブルクロス。紅茶の香り。色とりどりの茶菓子に笑い声。  
お茶会……そう、お茶会のイメージ。

そこまで考えて頭の奥がじんとしびれたような感覚に襲われて意識が途切れかける。

『また来るね。お茶会の続きは明日！』

無邪気な女の子の声。

『ええ。また明日』

『遅れんなよ……』

寂しそうな声に間延びしたどこか飄々とした物言い。どちらも男の子の声。

楽しそうな声なのに……光景なのに……どうして私はこん

なにも胸が痛いのか？

締め付けられる。罪悪感と切なさで苦しい。

『帰ろう？』

手を差し出してくれたのは……ダレ？

突然イメージが変わる。

車。驚いたような運転手の顔。耳を塞ぎたくなるような甲高いブレーキ音。そして私に向かって伸ばされた小さな手。

動けずにいる私を誰かが……助けようとしている。

その人を見ようと視線を動かす。だけど……見えない。

見ようとするより早く衝撃が襲い掛かり私の視界は闇に変わった。

## 双子によるアリス講義／前口上

『忘れないで……』

声だけが囁く。忘れないでと繰り返し私に頼む。思い出さないといけない。そう思う。だけどそう思うのと同じぐらいの強く思う。忘れさせて欲しい。

声が寂しそうに陰る。

『忘れてしまうの……？』

ズキリと胸が痛む。

「私は……」

声に意識を合わせようとすると頭の奥が痺れていく。逆に逸らそうとすると胸が痛くなる。罪悪感にも似た感情に私は知らない内に眉を潜めその場に蹲った。

視界が定まらない。

知らないはずの光景と今、現実に見ている光景が混じりあいどちらが現で幻か理解できなかった。

（知らない……こんな記憶……「私」は知らない！！）

お茶会も車も伸ばされた手も私は知らない。知らないのに！

「なんで……浮んでくるの……」

断片的。まったく系列たっていない光景が浮んできて私はどうにか

なつてしまいそうだった。

「・・・い・・・リン！」

乱暴に肩を揺さぶられはつとする。顔を上げると心配そうな顔の秋田がいた。

「どうした。顔が真っ青だぞ」

「あ・・・わ、た・・・」

震える手で秋田の腕を？む。息が苦しくて目を閉じる。  
言葉上手く出てこない。

「あ、きた・・・」

息が上手く吸えない。どうすればいいのか何を考えればいいのか  
何もわからなくなる。

？んだ秋田の腕だけが私には確かなものに感じられた。

「わた、し・・・」

「無理して喋るな！」

うわ言のように何か喋ろうとしてその度に止まる。そして止まる  
度に息苦しさが増していった。

忘れてはいけない・・・だけど・・・忘れたままでいたい。  
相反する二つの想い。

「・・・・・・・・・・っ！」

心が二つに割れそうだ。そう思ったその時。

「落ち着きなさい」

静かな声と共にひんやりとした手が私の額に触れた。その手の冷たさが知らない光景が消え、現実が少しつつ私に戻ってくる。

「心を落ち着けて。ゆっくりと息を吸うの。そうゆっくりと」

声に導かれるように頭の痺れがゆっくりと消えて鮮明になっていく視界に倒れかけた私の肩を支え、心配そうな顔をしている秋田と無表情に私の額に手を添えているディーの姿が映った。

彼らの姿を認識すると同時にディーが私の顔を覗きこむ。

「もう大丈夫ね」

確認するようなディーの言葉に頷くと額に添えられていた手がお供なく離れていく。

先ほどまでの不調が嘘のように私はいつもどおりに戻っていた。離れたディーの代わりに今度は秋田の心配そうな顔がのぞきこんでくる。

「平気か？」

本当に心配そうに聞いてくる。出会った当初じゃ考えられない顔だ。

（ってか私たちって出会って一日も経ってないんだよね・・・）

なんだか長い時間一緒にいるみたいに感じていた。

（なんか・・・可笑い・・・）

ふふつと笑う私に秋田が怪訝そう眉を潜めたので慌てて笑いを引  
つ込めた。

「平気だよ。大丈夫」

そう答えると秋田はホツとしたように強張っていた顔を緩める・  
・がすぐにしかめっ面になり軽く私の頭を叩く真似をした。

「ばゝゝか。驚かせんなよ」

「馬鹿って・・・ひど・・・」

心配させたのは本当だからなんとなくバツが悪く感じて拗ねたよ  
うな言い方になってしまう。

「心配させて悪かったって思うけど・・・」

駄目だ。なにを言っても言い訳じみてる。

こによこによと口の中で呟く私の肩にずしりとした重みが加わる。

（・・・え？）

目をやれば肩には手。視線を上げていくとそれまで静かだったダ  
ムが私の肩に手を置きながら興味深そうに私と秋田を見比べている。  
見上げた顔は酷く楽しそう。例えるなら新しい遊びに夢中な子供  
のようだ。

「ダム？」

声をかけるとダムはニツコリと笑ってくる。一体何があったのか酷く上機嫌に見えた。

「君達は「アリス」だったのだな」

「「は？」」

聞き慣れない単語に私と秋田の声が見事に重なる。その場の視線が一気に発言者であるダムに集中する。ディーははあ〜と仕方がなさそうに片割れの言動を見守っている。

・・・アリスって・・・私と秋田のこと？

頭の中に頭にリボンをつけてフリフリレースのエプロンドレスに身を包んだ自分と秋田の姿が瞬間的に浮かび上がりそうになり直前で叩き壊す。

仮にも女である私はともかく秋田はやばい。破壊力があり過ぎる。そんな光景想像の中だけとはいえ映像化したくない。

ちらりと秋田の方を見ると「なんだよ」と返される。まさか脳内で貴方のアリス姿を想像しちゃってつい見ていましたなんて言えないので「なんでもない」と視線をダムに戻す。

秋田は釈然としない顔をしていたが私の些細な違和感よりダムの言葉の方が気になるらしく彼も視線を戻す。

二人分のもの言いたげな視線にもダムは軽く微笑んで見せた。ディーの方はといえば殆ど表情を変えずに私たちを見守っているだけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9082p/>

---

そしてアリスのお茶会は終わる

2011年8月22日11時38分発行